

学びあう関わりを育む教室

—シティズンシップの教育という視点から—

A classroom where children grow their relationships to learn together
—A view point of education for citizenship—

お茶の水女子大学附属小学校

浅川 陽子

- I 研究の目的
- II 研究の方法
- III 研究基盤となる仮説
 - 1 「学びあう関わり」の捉え方
 - 2 フレネ教育学からの示唆
- IV 研究の内容 [実践記録より]
 - 1 友だちの声を聴くことから始まる
「朝のスピーチをその日のテキストに」(1年生通年帯单元)
 - 2 心とことばを重ねる
詩の暗唱～「はるにれ」写真絵本と「のはらうた」との語らい
(1～2年生帯单元)
 - 3 なかまは、笑いでつながる
落語の世界(2年生秋から冬)
 - 4 思いやって育つ
物語を読む～劇作りへ(3年生秋から冬)
 - 5 人に育てられる
「老いを見つめる」ことから(3年生冬から春)
- V 考察
 - 1 シティズンシップの基本
 - ① 意思を表明する権利
 - ② 協働的な意思決定
 - ③ 相手の何かを好きになる
 - ④ 自立的な賞賛や批判
 - ⑤ 自治の苦勞と喜び
 - ⑥ 契約と責任の意識
 - ⑦ 創造することの尊重
 - 2 今後の課題
 - ① 「活動」と「学び」の関係
 - ② 「判断力」と「公共性」の関係
 - 3 参考図書

付録 公開研究会要項より指導案の抜粋(平成12年度～14年度「ことば」)

I 研究の目的

「教室は、そこに集う人々が学びあう関わりを生みだしながら、ゆっくり時間をかけてシティズンシップを育む場である」ことを、個の自立を、なかまとの民主的な関係の中に見取る立場に立って自分の過去3年間の授業創りの過程を通して考えてみたい。

教育課程は、学習指導要領に基づきながら学校ごとに総合的な学習等、創意工夫できる時代になった。目の前の子どもに教えたことと育てたいものを明確にし、学校独自のカリキュラムを創ることが求められている。ということは、言い換えれば、教師にとって、子どもの学びの意義を真正に見据え、将来に向けてどう育てるかの責務が、より増したということである。

そもそも「学ぶ」とは、どのようなとなみなのだろうかと呼味し、原点を問う必要がある。

また、公教育としての学校という場、教室という限定された空間に限って考えたときも、そこで「学ぶ」ということは今後いったい何をめざせばよいのかと考える必要もあろう。

学校において基礎基本を身につけることが絶対の急務とされる世の中の風潮だが、何が基礎基本かの議論は足りない。〇〇力がついたかどうかとパフォーマンスを評価することで教育の善し悪しを語ることは落とし穴がある。ひとりひとりの子どもの心やからだと切り離せない内的でオリジナルな学びは軽んじられがちになる。また、将来の社会を主体的に協働的に創る市民になる教育（＝シティズンシップの教育）も、公権力による教育的価値の再生産、効率重視の側面からは決して明らかになってこない。私はそう考えている。

関わりあって学ぶいとなみは、原因・結果で割り切って説明できないほど、深く内面的に、他者とつながっている。その、他者とつながる「つながり方」「状況そのものの創造」のところに、シティズンシップの課題が立ちあがる。ただ、シティズンシップの教育とは具体的に何なのか、その内容や方法は実践的にほとんど明らかになっていない。特に小学校低学年ではなおさらである。なかなか目には見えにくい「風土」や「精神」に触れる部分だからだろうか。

私は、授業における子どもの関わり、そこで生起する小さな出来事の意味に着目し、絡み合って混沌とし、熟成するタイプの学びを時間をかけて見取っていかうと考えた。

子ども達のことばや行動から、その場に生まれている学びを押し量り、関わりの中に育ってくるものを記述するしごとである。教師と子どもで授業創りをした過程を、シティズンシップ育成の視点で考察しなおすことによって、公共空間としての教室の課題が明らかになり、これからの姿が展望できるだろう。それが本研究の仮説と目的である。

II 研究の方法

- 1 学びあう関わりモデルを定義する。
- 2 平成12年～14年に行った学習活動のうちの5つについて、子ども達の学びのみちすじをたどりながら、子どもが学んだこと、教師が教えようとしたことや学んだことを合わせて振り返り、検討する。ただし、本稿では「ことば」という学習分野の実践を考察する。他の分野や領域との関連については別の機会に論じたい。
- 3 教室での学びあう関わりを、シティズンシップの視点で考察する。

III 研究基盤となる仮説

1 「学びあう関わり」の捉え方

子ども達が学習しているときの姿を観察すると、その子の内面の働きの重要性が浮かび上がってくる。子ども達が夢中で何かに入り込むときには「体が(自然に)動く」「やってみよう心が動く」などのキー

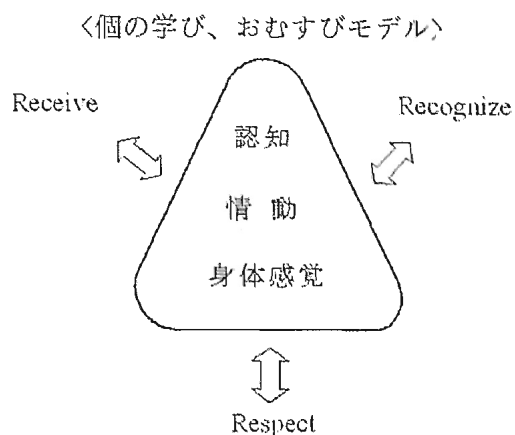
ワードが見つかり、〈身体感覚〉と〈情動〉が不可分であり、〈認知〉と切り離せない関係であることが見て取れる。発達心理学の知見からも、快適な感情状態にあるときに人は情報処理のスピードが速くなるとの示唆がある。

そこで、個の学びの構造を〈おむすびモデル〉で表す。特徴は〈認知〉〈身体感覚〉〈情動〉を学びに組み入れている点である。学力を、表面に表れたパフォーマンスに見るのではなく、より心や身体の内面につながったコンピテンスと見る。〈身体感覚〉とは体全体で感じる感覚、〈情動〉とは主に情意面の心のはたらき、〈認知〉とは主に思考面のはたらきのことであり、それらは不可分のものである。

また、おむすびモデルが、人・もの・ことと関わりながら大きくなったり、中身が充実したりする学びの様相を考えるとき、欠かせない資質・能力が3つある。

- receive 受け入れ
- recognize かけがえのなさを認め
- respect それを敬い愛すること

秋田喜代美 『子どもをはぐくむ授業づくり』(2000) 岩波書店より



このように個の学びをモデル化した上で、次に、それを取り巻く「関わり」に目を向け、学びあう関わりの方のフェイズを図示すると、下図の参加～協働～創造の姿になる。

〈身体感覚〉〈情動〉〈認知〉からなる学びは、人・もの・こととの関わりの中で磨かれていく。その関わりあいをおにぎりモデルと同様に、目に見えるものの深層を思いやり、内面の働きに着目してみると、(学びの)場に自分の内的動機で居場所をつくり、他者と何らかのやりとりをして、今までとは違う世界を互いに見出しているいとなみ(=協働的な学び)が見えてくる。子どもの姿に近づけて定義するとこのようになる。

「参加する」…今の自分に自然になじむかたちで(何かいいことありそうだ)(おもしろそうだ)(ぼくはこう思う)(やってみようかな)(もっと知りたい)と思ったり行動を起こしたりすること。

「協働する」…(どうしたらよいか)と葛藤をお互いに、自ら乗り越える思考や行動をすること。

あるいは、そういう関係をつくること。

「創造する」…それまで見えなかった価値や良さ(善さ)があらわれること。あるいは、関係の新しい意味づけがなされること。

シティズンシップは、まずは「参加する」いとなみの中に立ち現れるのだろう。どのようにお互いの関わりを結ぶのか、状況はどうお互いに創るのか。

支配-従属の関係ではなく、民主的な責任と自由を行使しながら学びあう関わりを創り出す、そういう資質がシティズンシップなのではないかと思われる。

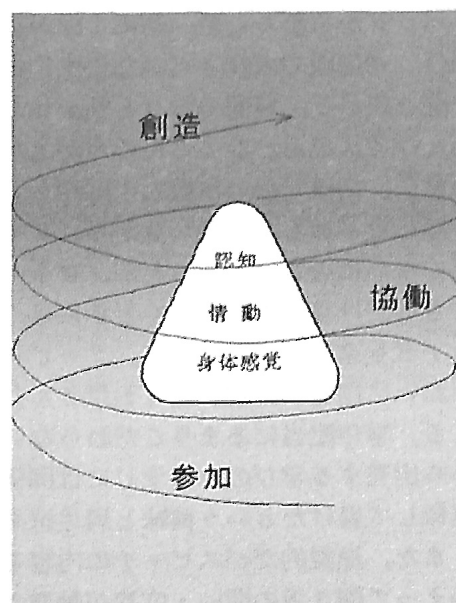
その辺りを、実践に即して考えていかなければならない。

2 フレネ教育学からの示唆

「創造と表現の欲求が、現実的な影響力をもった思想の一つであり、その上にこそ今までにない新しい教育学をうち立てられるのだということを示すために、播いた種子の開花に力を注ぐ」
若狭蔵之助訳(1979) シリーズ世界の教育改革7『フランスの現代学校』明治図書

私は13年前、子どもの生活の中にある思考を教育の主要な要素

〈学びあう関わり〉



とするフレネ教育に出会った。研究会に参加し、文献を読み、南仏のフレネ学校での研修やフレネ教育を実践する公立学校の見学に行った。

最も示唆を受けたことは、〈能力〉よりも〈興味〉により多く重要性をもたせることを教育生活の基本にする点だ。「〈興味〉とは漠然とした、表に現れにくい、試験でおしはかることのむつかしい、しかし言ってみれば、人間が働く時に見出す喜びを決定する何ものかである」からこそ、生涯いろいろなことを体験しながら生きていく重要なファクターになる。実際に、フレネの教師が仕事をする教室を訪問すると、様々な学習材が豊富に用意され、自由作文から生まれる対話、手仕事、学校間通信、コンフェレンス（研究発表）など、個々の興味が複合されながら市民として育っていく、その「技」が豊富であることに驚かされる。

小さいときから自分の考えや行動に責任を持ち、それを表現し、まわりの人やものごととの関係を常に編み直しながら、創造的な思考・協働的なしごとをする人を育てる。私はフレネ教育のエスプリをそのように読みとって実践に生かそうと考えた。

IV 研究の内容 [実践記録より]

1 友だちの声を聴くことから始まる

…「朝のスピーチをその日のテキストに」（1年生通年単元）…

1年生になったばかり。お互いの名前もほとんど知らない。でも「学校が始まって、珍しいこといろいろあるでしょう？みんなにお話したいニュースがある人、きつといますね？」と声をかけると、何人か前に出てくる。

仲良しどうしのおしゃべりとはちょっと違う学級全体を意識した雰囲気の中で、みんなに伝えたいことがあるから語るという自然な欲求に基づくようにして、毎朝、スピーチの時間を作る。

8時半から始まる朝の会。学校の生活は先生の号令や説明ではなく、子どもの持ち込む話題で幕を開ける。

学校とは先生に教えてもらうことをただ覚えに来るところではなくて、自分で感じ、話し、考え、行動することが第一に大切にされる場所。そういう、学びの主体としての実感、行為者としての責任感を育てる体験をたっぷりさせる。1年生の最初にこそ、自律につながる学習観をしっかり育てたい。

スピーチしたいと思ったら、朝の会が始まる前に、ホワイトボードに名前を書いて予約しておくことにする。「おはよう！」と教室に入ると、『きょうのスピーチ』の予約用ホワイトボードに自分の名前をていねいにゆっくり書いている子、自分は話さなくても聴くことを楽しみに待つ子。子ども達は、お互いの存在、その生活から紡ぎ出されることばに関心を向け始める。

ベッドから落ちた話、初めて歯が抜けたこと、干からびたおたまじゃくし、帰りの電車で寝過ごした事件、幼稚園で大好きだった先生に習った歌を披露する子もいる。

聞き終わり、質問のやりとりをしたら、最後に「きょうはどれをノートに書こうかな」と問いかける。みんなで決める。たくさん声が上がるなかで、ひとつを選ぶ。子どもの多数意見を尊重するが、教師の意図、指導したい事柄との関連も若干考慮する。

話した子どもと相談しながら、スピーチの内容を3行程度の文章にして板書する。後期になると、5行くらいになる日もあったが、なるべく短くすることに心がける。そのとき、子どもの発することばをできるだけ尊重する。書くときには、生活の話題のなかに出てくる漢字はあまり躊躇せずに使う。板書を子ども達はノートに写し、クーピーペンシルで絵を描き加えて「きょうのスピーチ」の1ページをていねいに創る。「友だち」「お母さん」「お父さん」「学校」「駅」「遊ぶ」などの漢字は入学後によく出てくる。学年配当にあまりこだわらない。子どもにとっては「何年生で習うべき漢字かどうか」は、生活から発する学びのみちすじには関係のないことがわかる。話し言葉でよく使うことばだから、板書を真似して書けたという興味と満足感を育てることができる。

また、逆説的だがスピーチの内容を、みんなにわかりやすく最初から話し手の緊張を強くない方が、かえって聞き手の問い・応答が触発され、対話が増える。

例えば「きのう、はじめてひとりでセブンイレブンにやきにくのタレを買いにいきました」という短いスピーチ。「そのとき何色の服を着ていましたか」とか「また行きたいですか」というような質問が出る。その質問によって、スピーチの内容をめぐる状況が次第に明らかにされていくところがいいと思う。共にことばで世界を創る・映し出すという作業だ。

しかし、「初めて」に着目し、その価値をクローズアップするのは教師の仕事だろう。「初めてっていうことはどきどきするし、うれしいし、わすれられないね。みんなも最近、初めて〇〇したこと、あるでしょう?」と話題を広げる。

「ある!ある!1年生になって、初めての友だちが、やすおくんです。」

これを聞いたときのみんなの歓声と、恥ずかしそうにうれしそうに真っ赤になった無口なやすおくんの顔が忘れられない。「初めて」をめぐる生活に沿ったことばのやりとりを展開する。それが、自分たちにとって意味あることばの世界を共有した感触になる。

たとえスピーチが頼りないものであっても、それは個人の失敗とかマイナスポイントにならず、学級のなかまの関わりあいによって補われ、満足のいく展開に成り得る。そういう可能性に満ちた経験は、自分のことばで表現することへの安心感やなかまへの信頼を育てる。ことばはひとりの財産であると同時に、みんなで世界を現していくものなのだ。

○朝のスピーチから生まれた学習テキスト一覧

(平成12年4月入学～13年2月)

月	スピーチの題	興味を中心	指導した言語事項
4	かたつむり 電車で寝た なめくじ ついてきたお母さん 食べられたおたまじゃくし 戦争 思い出のハーモニカ	友達の名前を覚えること 一人で学校に来られるかな おたまじゃくし集め 祖父母から聞いた戦争 思い出とは。	ひらがな・カタカナ・数字 ・初めはスピーチをした全員の名前と題を板書、視写。3回目から1つ選んで文章を書くことを始めた ・19字から始まり5月末までにひらがなは全部登場。 ・カタカナは2学期末までにヲ以外は単語のなかで全部出てきた。
5	アイスとかえる 初めてのおつかい はなばたけ バスジャック モルモット おじぎそう しゃぼんだま ガラス がいこつやま おともだち フラワーアレンジメント いちご たんぼぼつんだ プレステーション	再、おたまじゃくしを飼う 一人でおつかいに行った経験 ～みたい。喩えの言い方 世間を騒がせているニュース ペットの話 めずらしい植物について しゃぼんだま遊びのこつ けがをした経験 夜見た夢の話 入学して初めての友達是谁か みんなで折り紙のお花作り	「喩える言葉」集め だっこしたときの感じを表す言葉集め ふわふわなどのオノマトペ 「初めて」のこと集めと、その喜び
6	ひみつきち ねこのみーちゃん すずめ びちょびちょ れんらくちょうばたば	段ボールで遊ぶこと ペットがソファでおしっこ 通学中に見つけた事件 ラーメンが鼻から出た笑い話 雨の日の困った話	

	た くものす 手話 ゆうれいかくかた アクロスティック	雨に光るクモの巣 トゥモローを手話で。 ドキドキした話 名前を使って。	「それ」指示語の使い方 身体で表し伝える言葉 自分や友達の名前を使った ことばあそび
7	フットボール おにやんま	楕円形のボールの飛び方実演 「死んだ」ことがどこでわかるか？	
9	ビールがこぼれた あさがおの種 お祭り がらのせっけん ドジョウ ミイラ 歌の名人 さなぎにさなぎをつく った ママのねぼけ 死んだちょうちよ あげはのさなぎがかえ るかも	お父さんお母さんの晩酌 花が枯れた後の様子、観察 ヨーヨー、綿菓子などの話題 石鹸に絵を描く方法、実演。 ドジョウつかみの話。ドジョ ウとは、どんなモノ？ 上野のエジプト展の話題 好きな歌 黒あげはがさなぎから無事に でてくるかどうか？ 朝の忙しい家の様子 大事に飼っていても死んだ生 き物のこと、悲しさ 細かい観察	形の似たカタカナの指導 薄茶色など、色を表す言葉 集め 2学期から漢字使用を開始。 9月のスピーチの中で出て きた漢字…月、日、父、 上、木、花、水、人、大、 金、川、口、竹、山、火、 田、円、下、白 (漢数字)(曜日)
10	運転手さんも冬服 あかちゃん 秋の虫 季節はずれのあさがお 工事現場 点字図書館 マラソン ゆうぎ王カード もんしろちょうの幼虫 犬がにげた お守り こおりおに	朝、都電の運転手さんが衣替 えをしていたことに気づいた お母さんのおなかにいる赤ち ゃんのこと バッタがおでこにとまった笑 い話 今頃こぼれ種から芽が出てつ ぼみまである。本当に咲くか どうか？ 学校の前のマンション建設 点字とは。 大学生が走っていたこと 初めて交換したうれしさ 教室前の畑のキャベツにいる 青虫発見 飼っている犬のこと おねえちゃんがくれた手作り お守り 一緒に休み時間に遊ぼうとい うお誘い	「 」の使い方 10月…秋、虫、小、中、 見、目、学、王、校、犬、 本、休、雨、正、右、左
11	段ボールの宇宙戦士 おたのしみ会 ディズニーランド キラキラのスライム ハトのせぼねをしゃぶ	ハロウィンについて 提案により、クラスでお楽し み会を計画することになった くまのプーさんのこと スライムの作り方 飼っている犬が公園でハトの	触ってわかる字 11月…玉、草、糸、星 座、森、林、力、黒、姉、 手、色、分、兄、車、百、 空、母、東京、天、早、足

	<p>ってた</p> <p>お寺のじゅず玉 トゥモロー</p> <p>さつまいもの汁 ハムスター 夜中の4時の流れ星 星座の本</p> <p>12 年賀状 モルモットの赤ちゃん</p> <p>手作りローソク</p> <p>ポコペン</p> <p>迷路</p>	<p>赤ちゃんを丸飲みして次の日 まで骨をしゃぶってた話</p> <p>じゅず玉のネックレス作り方 お姉ちゃんに教えてもらった 手話</p> <p>ふしぎな実験 かっ車を回すハムスター 今夜の夜空の流れ星のこと いろいろな星座</p> <p>年賀状に俳句を書くという話 赤ちゃんを触ってはいけない こと</p> <p>おじいちゃんに教わったアル コールランプの使い方</p> <p>六年生の真似をして覚えた遊 び</p> <p>お楽しみ会の準備に夢中で夕 方4時に学校に来たこと</p>	<p>12月…年, 赤, 名, 六 年生, 夕, 冬, 男, 子, 女, 文, 絵, 字, 先生, 町</p>
1	<p>雪あそび マジック ほう石のネックレス</p> <p>しつこいお兄ちゃん おりがみコースター</p> <p>チーチのホームページ マジック 紙ひこうき 万げきょう</p>	<p>楽しかった雪 手品の実演 お母さんのふるさとアメリカ のおみやげ</p> <p>兄や姉の話題 お母さんにおしえてもらった 16枚使う折り紙</p> <p>家のパソコンでみたもの 手品の実演 よく飛ぶ工夫</p>	<p>1月…学期, 今年, 千, 万, 雪, 石, 氷, 家, 個 遊ぶ, 茶, 家, 私, 紙</p>
2	<p>くふうした万げきょう ラベンダーのリップけ しゴム ディズニーのかおりペ ン どうメダル また生まれちゃったモ ルモットの赤ちゃん</p>	<p>万げきょう, 実演</p> <p>ビーズを入れるときれい 珍しい形のけしゴムのこと</p> <p>いいにおいのペン</p> <p>野球の試合の銅メダル</p>	<p>2月…入, 光, 店, 気, 今, 出, 青, 思,</p>

○ 子どものスピーチから生まれるテキスト, 通年の実践を振り返って

① 「易→難」という指導の常識について

短作文からだんだんに書く量を増やしていくというような「少→多」の指導観, スピーチも最初は短くてもいいからだんだんに詳しく, つまり, 易しい(と大人が思うこと)から難しいことへという一般的な指導の常識は, 疑ってみる価値がありそうだ。

子どもたちの身近なところにある言葉を学習の核にするという基本精神から考えて, 関わりのなかで発見されたことを, 再び自分のなかに取り込み, それをまた外に向かって新たに発信する力を育てること, それら相互の関係を視野の中に収めて指導することが大切だ。個々の独特なことばの力が肯定的に, かつ多様な回路でつながる場をつくるように心がける。そこで目には見えない豊かさ, 言葉とそれを使う人の心があたたかく育まれる。

留意すべきことは, 指導の系統性に子どもを合わせるのではなく, 話したり聞いたり考えたりする

場を共に創る力を臨場的に育てる努力であろう。

② スピーチそのものが説明不足だったり、よくわけがわからなくても、その後の質問や感想が活発で楽しく展開することがある。ここで考えられることは、「理解」は「応答」のなかで起こっているということだ。つまり、「スピーチがちょっと下手」という事実や失敗が、個人の力量としてのマイナスイメージ、言語能力のあるなしによる選別の意識につながるのではなく、学級の仲間の補充によって、満足のいく結果に成り得るという体験だ。これが互恵学習と言われるスタイルの実現ではないだろうか。

③ 毎朝のスピーチを学習のテキストにすることによって、1年生で指導すべき言語事項は網羅できることが実証できた。特にカタカナ言葉は最初からかなりの頻度で出てくるので繰り返し書くチャンスが多い。子ども達がよく使う生活の単語として学ぶことができる。

漢字については2月末で100字を超えており、1年生の学習内容として定められている80字はもちろんのこと、「難しくても書いてみたい。文の中で使いたい」という意欲に裏付けされて書くようになっていく。生活用語彙として、教室での学びの文脈のなかで漢字を使う習慣が大切であることがわかる。

2 心とことばを重ねる

…詩の暗唱～「はるにれ」写真絵本と「のはらうた」との語らい (1～2年生帯単元) …

子どもたちは、自分のもっている語彙ではなかなか表せないものを、直感的に優れた詩のなかを感じ取って、共感とともに自分のものにしていく。

自分の書いた詩でなくても、どんな詩を選び取ってくるか、何を気に入って暗唱するかというところに、その子の「今」が表現されている。自分の今の心を大切にしたい。「ぼくは、しっかりしたおとながそばにいないと、何もできない」と言う2年生の男の子に「自分でやって大丈夫」「へた、と注意ばかりされたい」という小さな自信を育て、徐々に自律をうながしたのは、お気に入りの詩を探して写す、そのことの繰り返しだった。すぐに発表できなくてもいい。心を映すことばをたくさんもつことだ。たった8年しか生きていないのに、傷つき、すこやかな自信を自らに育て損ない、生きる気力に乏しい子がいる。そんな子に、びたりと心に重なる詩との出会いは、たとえば言えば「薬」になる。

詩の暗唱と、その発表交流を生活の中に習慣化するために、計画表を使う。

私が「計画表」を用いる目的は、2週間単位の一人一人の自発的な学びのリズムを作ることと、それを基盤にした関わりを産み出すことだ。

計画表は、そのとき子ども達の様態によって様々なタイプが作成可能だろう。学級担任として、朝のインシアティブ、みんなのためのひと仕事から立ち上げることもあるし、「ことば」担任として専科的にこだわる視点でつくる場合もある。左のものはそのひとつの例である。

なぜ、計画表を使うのか、そこをよく考える。目の前の子ども達に、今、何をどう育てたいのか。例えば、「個別の個性的な学びをもとに対話を創り出したいから」「受け身の学習態度を、自分が主人公だという自覚をもっていきたいから」など、計画表を導入する目的を、教師がしっかり把握することから始まる。

計画表はノルマ表ではない。自分の学びのリズムを、予測し、実行し、あとで振り返って評価し、次につなげるためのものだ。

2週間で、どのくらい進められそうか、子どもは自分でまず計画をたて、赤線でめもりに線を入れておく。1年生の夏頃から、このような「計画表で進める」時間をときどき作るようにした。学ぶいとなみへの自律心を育てる試みである。

そして、個別の時間と発表交流の時間を交互に設ける。なかでも、詩の暗唱を、お互いに聞きあうこ

とを通して、子どもは友達の心を知っていった。

ころころ　こいぬ　けんきち　（くどうなおこ「のはらうた」より）
 かなしいと　おもく　ひきずる
 うれしいと　かるく　はためく
 しっぽは　ほくの　ころろだ

S子（1年生）はこの詩が一番のお気に入りだ。他にいくつも好きなものはあるけれど、この詩を口ずさむと何だかじわーっとうれしくなると言う。

…「ころころ」の詩は、「しっぽはほくのころろだ」ということばと、だい名の「ころころ」ということばが、とても人のころろろにひびく気がして、この詩を心にのこしました。私からのおすすめです。ぜひあんしょうしてください。（S子自作のアンソロジーの後書きから）

おとなしくて授業中に手を挙げて意見をいうことなど、なかなかできない。みんなの前で話すなんて、よほどのことがなければ恥ずかしい。S子にはそんな面がある一方、一輪車が得意でバイオリンのレッスンも大好きな、ひそかなやる気のある子。S子の選ぶ詩にはこんなものもあった。

はるがきた　うさぎ　ふたご　（同上）
 ももいろの　すきとおる　みみに
 きこえてくる　はるのひびき
 おかのうえから　らんらん
 たんぽぽの　ふかふかの　うた

これに対しては「春の風の感じ方。とてもやさしい春が来たと思うとすごく心にひびきます」とコメントしている。S子の選んだ詩からもうひとつ。

ためいき　すみれ　ほのか　（同右）
 やわらかい　はるのひは
 ためいきが　にあいます
 おもいだせそうで
 おもいだせない……そんな
 うつくしいもののための
 うつくしい　ためいきが

担任の私も学級のなかまたちも、S子の選ぶ詩を通してS子のいつも新しい姿かたち—それは見えない心のなかにあってやわらかくてうまくつかめない—の感触を知っていく。西口敏治「詩が大すきになる教室」（1995）さえら書房には、このように書いてある。

学校は、教科書に書いてあることや先生の言うことを、そのまま受け入れてためこむ場ではなく、もっと自分を表現し、主張する場になる必要があります。自分を表現し、主張していくことは、生きていくことそのものです。「いやだ」とか「やめてくれ」とも言えないままに、死んでいった子のことを考えると、自分を表現する回路は、いくえにも用意されていることが必要です。せまい意味での詩の指導についても考えなおしてみる必要を感じています。一つの詩をていねいに鑑賞したり、詩の鑑賞のしかたや技法について学ぶことはもちろん意味のあることです。そのまえに、このくらいたっぷりとことばの中にあそび、ことばとまじわり、詩をとりこんで、からだぐるみ楽しむべきだと思うのですが、どうでしょうか。（P155より引用）

からだごとリズムにのって楽しんで、詩をいっしょに口ずさむ姿には、ともに居るうれしさも溢れる。好きで気に入っているということが、内容の共感的な理解へエネルギーを生み出す。

暗唱を聴きあうといういとなみは、「暗唱する」という能動的なしぐさの向こうにある、他人の声を「きく」ことへの注意深さを育てている。発表する側を「動」とするなら、それを聞いてまわりの場の雰囲気や創っている「静」のなかに、予測しなかった発見—創造—がある。

例えば、何を考えているのかわからないような、自分のことばがなかなか出ないR男が暗唱する詩に、みんながはっとする。

あざみ　みずかみかずよ
 じぶんを花火にして打ち上げます

ヒツジ まどみちお
紙に
バカ
オタンチン
アンボンタン
とかいて
鼻の先につきつけてやったら
メーメーウメー
とたべてしまった
その目のずずしいこと
うかんでいたわた雲を
いつのまにかたべてしまった
青空のようだ
たべられたのは紙ではなくて
ぼくという名の
アンボンタンではないかと思われてくる

無口な子どもが、詩のことばを借りてする自己主張は、学級のなかに名状しがたい衝撃波を広げる。「おもしろい。どうしてその詩を選んだのですか？」と、尋ねる子がいる。

「……………」(R)

「どこで見つけたのですか？」

「図書館」(R)

R男は応答し、説明することばがほとんどでない。でも、暗唱する詩のことばの中に繰り返される、バカ、じぶん、ぼく、うそなどのことばが、聞いている側に残像のように残る。高村光太郎の「根付けの国」を暗唱したとき、ある女の子がたずねた。(魂をぬかれたようにぼかんとして／自分を知らない／こせこせした／命のやすい／見栄坊な／小さくかたまって／収まり返った／猿のような／狐のような／ももんがのような／だぼはぜのような／めだかのような／鬼瓦のような／茶碗のかけらのような日本人…一部引用)。

「どうして、そういう詩をいつも見つけられるんですか？」

詩のことばについてのやりとりは、感想として語られるが、聞いた結果を表現したのではなく「他者を理解するという学び」の出発の瞬間のように思われる。「図書館でぼくと同じ名前の人だなと、詩集をずーっと見ていて、これがいいと思った」と答えたR男。初めて、自分を語ることばを、相手に触発されて、つむぎ始めたのだ。心がふと留まることばをきっかけにして、学びあう関わりがさまざまに編み直されていく。

また、ときには、ことばが学びの空間にリズムのよい心地よさを醸し出すことがある。詩を聞いている子どもたちのからだに、ことばのリズムがすうっと入っていく状況に出会うことがある。

すみれ色こもりうた すみれほのか (のはらうたより)
そより かぜが ふいてくる
ひらり はなが ゆれている
はらり ゆめが ひらいたね
ふわり まるい ねむりだよ
きらり ひざし ふりそそぎ
さらり かわが ながれてる
ゆらり ゆめが ひろがるね
ほろり ふかい ねむりだよ
いま せかいが すみれ色
ねむい 春の こもりうた

1年生のM子はこんなはずむような詩が大好きで、見つけるとすぐ覚えてしまう。声に出すと自然にからだも揺れてくる。すると、聞いている友だちにも輪が広がり、詩がうたになる。そろり／ひらり／はらり／ふわり／きりり／…リズムを共に、人の呼吸を感じながら、そこに自分もからだごと合わせる。それが気持ちのよいものだと感じ取れる関わりは、教室にあたたかい風土を創っていく。

しかし、そういう心地よさとは無縁という立場の子どももいるものだ。

S子は入学したころ、挨拶も返事もすんなり出なかった。緊張が強くコミュニケーションにならない。通じないからだからか椅子を振り上げるような暴力的な行動もあった。でも、人とあまり関わらずに、黙って自分のしごとを進められる計画表の時間、個別の時間には割に落ち着いている。発表交流の場できどき詩の暗唱もする。声は固く小さい。「聞こえません」とまわりから声がかけても、大きな声にはならない。個人面談の時、母親にそんな話をする。「みんなの作文や暗唱を聞くのが楽しいと言っています。詩をノートに書いているようです」とのことだった。ノートに詩を書きためていることは知らなかったのを見せて欲しいと私が母親に言ったら、次の日S子はノートを持ってきた。

未来

未来は、いいことがある
私はいつもねがっていた
ほんとうに いいことがあった！
未来というものは いいものだ

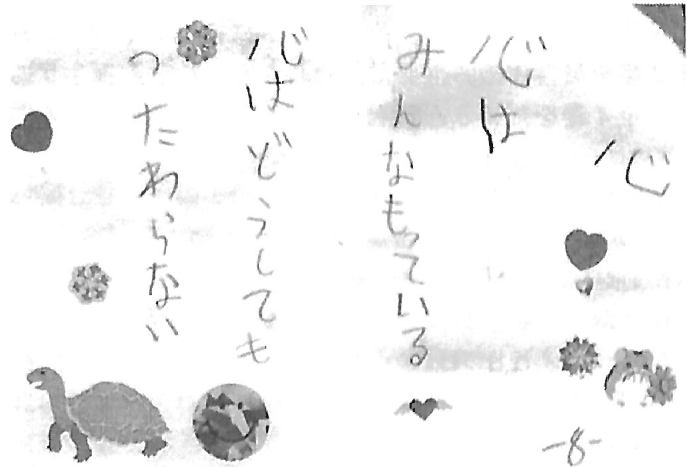
普通にことばを交わすおしゃべりができないけれども、ノートに綴られていることばを見て、私はS子の内面を窺うきっかけをつかんだ。詩集を創ることを勧めた。2週間後、自作十編が書いてある詩集が出来た。

一人

私は友だちも
姉も妹もない
いつも
さびしい

涙

涙というものは
しぜんにでる
しぜんにでない涙は
涙ではない



これを手がかりにまわりの子とのコミュニケーションが生まれた。S子の心の叫びのような詩を見て、声が小さくて聞こえない・わからないというパフォーマンス面から理解していた子ども達は、認識を覆される。S子も、詩という表現方法を知ることによって学びがいを見いだしただろうが、それに劣らずS子となかまの関係性が変わっていったのだと思う。

関係性の変化とは、お互いに未知の部分をもっているであろうことを知り、それを隠すのではなく、表現できることへのあこがれを抱いているような感じだろうか。

書いたり作ったり、表現を試行錯誤して手仕事の作品を学びの履歴として残していく。その営みの途上で、子どもは粘り強くやりかけたしごとにこだわっていく。詩集、アンソロジーを創る時の、子どもの集中力は高いものだ。授業時間にこだわることなく、その気になれば休み時間も続けている。

自分の責任で考えて行動している。そういう自覚が芽生えることは、お互いの信頼関係につながっていく。ふと気づくとS子の乱暴はめっきりおさまっていた。

こんなふうにならぬようにみんなで気に入りの詩に親しんで、自分と友だちの関係を深め2年が過ぎた。2年生

の冬。「はるにれ」という福音館の写真絵本を学習材にしてみたいと私は考えていた。北海道の草原にすくっと立つ、すがすがしいはるにれの木の四季折々の姿。文字のない、その絵本に、子ども達の想像でお話を作ったらどうだろう、はるにれと語る動物になって想像の物語を作ってみようか、そんなことを考えていた。ヒントにしたのは、同じ写真家の姉崎一馬さんが谷川俊太郎さんと作った「ふたごのき」。寄り添って立つ二本の山桜の木（姉と弟）が、季節の移ろいの中で愛や別れ、いろんなことを語り合う、心に沁みいるように美しい写真絵本だ。残念ながらもう絶版になっているのだが。私はそれを子どもに読んで見せながら、「はるにれ」でも同じように創造ができないかと思っていた。

しかし実際にやってみると、うまくいかない。「雪が降りました。はるにれは寒くてごえそうだと小さな声で言いました」という調子で、子どものことばは写真の説明になってしまう。風景や細かい木々の枝先の葉などにも目を向けさせ、想像を喚起したが、イメージはなかなかふくらまない。子ども達は、お日様や雲やアリになって喜んでノートにストーリーを書いては「できた、できた」と読んでくれるのだが。

さてこれはどうしたらいいかと私が行き詰まっていたある日「のはらうたが似合うかもしれない」と、K男が言った。「あ、なるほど！」

私は尋ねた。「この写真だったら（秋の空のところ）、どの詩？」

すると、「そうだな……。ぼくは、こっちの雪景色のページ（輝くような雪の朝のところ）の方が好きだけど」とK男。

「そうか！好きな写真に、ぴったりくる好きな詩を探してみればいいんだね」

急に、話が進んだ。K男のアイデアをみんなに伝えると、「よし！」という感じでそれぞれ「あれがいい。これがいい」と意見を言い始めた。

（自分で「お話作り」するのが難しかったから、いろいろ迷って「のはらうた」が浮かんだ）と、後でK男は言っていたが、そのヒントによって「はるにれとなかよしの、のはらのなかまたち」という2年2組全員合作の、世界に一つしかない物語が誕生することになったのだ。工藤直子さんの「のはらうた」全4巻をたくさん暗唱していた子ども達だったからこそ、結びついたできごとだろう。

〈夏のはるにれに向かって〉

ひなたぼっこ　こねずみしゅん
でっかい　うちゅうの　なかから
ちっぼけな　こねずみ　いっぴき　みつけたして
おでこから　しっほのさきまで
あたためてくれるのね
……
おひさま
ぼく　ときどきするほど　うれしい

〈月夜のはるにれに〉

はっけん　ふくろうげんぞう
よるになると
あたまも　めのたまも　ひかってきて
いろんなことを　はっけんする
ゆうべは
「うちゅうの　ふところも　でかい」
ということも　はっけんした
しんはっけんであった

3 なかまは、笑いでつながる

…落語の世界（2年生秋から冬）…

ことばで遊ぶというのは、昔から脈々と伝えられてきた文化であると共に、いつも新しく生まれている現在進行形。でも学校ではまじめが価値とされてきたから、なかなか「笑いそのもの」の工夫を学ぶことはなかった。お気に入りの詩を選んで暗唱するということが続けていると、おかしい詩、笑える詩、笑ってもらえるような詩はないかと、せっせと探してくる子がいる。それを聞き、笑い混じりに共有する時間を、子ども達はとても生き生きと過ごす。

せんきょの車 「ユーモア詩集」より

せんきょの人が
 にこにこして手をふっていたので
 ぼくも
 手をふりました
 そしたら
 「ごせいえんありがとう」
 と言われた
 ぼく
 5千円なんかあげてないよ

洒落が好きなM（2年生）はこういう詩に目がいく。でも、いざ、選んだ詩を発表しても、おもしろさがストーンと落ちるようになかまと分かち合えないことが多い。発表する側は笑っているのだが、聞き手に笑いはなかなか広がらないものだ。ことばあそびの笑いを、善さとして共有するにはどうしたらよいのだろうか。

ことばで遊ぶ感覚を、質のよい笑いと一緒に育てたいものだ。

「笑う一瞬」をつぶさに見ていると、ちょっとずれて「笑えない子」は、笑える状況を瞬時に理解していないのだ。おかしみを感じ取る、それを共有できると楽しい。

落語をとりあげることを私は考えた。

お正月の新春顔見せ寄席、浅草にでかけて私が楽しむ。映画と違って、おいなりさんでも食べながら1日中座って遊んでいられる寄席の文化。365日休みなし。上野広小路へも行った。寄席で「子どもを連れて来てもいいですか？」と聞くと、「どうぞ。600円です」と言われるが、「あ、40人なんですけど」と言うと、受付の人は難しい顔。集団では他のお客さんの迷惑になる、大人向けなので小2ではわからないだろうと断られる。どこの寄席でも同じ。（残念だ。しかたがないから休みの日に家の人と行ってみてくださいとするかな）と、まず、落語との出会いを学校で作るという最初のところで、つまづいた。

落語絵本を子どもに読んで聞かせた。私には演じることはとてもできないが「じゅげむ」「めぐるのさんま」「まんじゅうこわい」など。落語は初めてという子ばかり、近くの区立図書館から、子ども落語関係の本をまとめて借りて教室に置いた。子どもも「おじいちゃんの家にあった」とか「本屋さんで見つけてお母さんに買ってもらった」など落語に目を向け始める。カセットテープに入っている「古典落語」もみんなで聞いた。が、江戸時代の文化あれこれを知らない子ども達にはぴんときない話もある。普通は笑わないような変なところで笑ったりして、オチは意味不明でもそれなりに「おもしろかった」と言うからふしぎ。声や言い回しのおもしろさだろうか。でもやはり、本物と出会わせたい。

「寄席に行かせてもらうのは無理でも、何とか、落語を聞かせてもらう手はないか」と、再度たずねると、ああこの前の先生ですねと言って「直接電話してみてください」と落語協会を紹介してくださった。放課後、上野まで、相談に行く。

会って話してみればあれこれと話がはずみ、落語協会のビルの2階で、寄席を特別に作りましょうかと協会の方が提案してくださった。ありがたい！でも費用が心配…。子ども一人500円でいいと言ってくださる。高校のクラブ活動の顧問や、中学の国際理解講座で落語を斬したりしている柳亭燕路師匠さんが、子ども向けには適任だから都合を聞いておきましょう、いつ小学生さんは来られますかと、とんとん拍子に話がまとまった。

2年生3クラスそれぞれ、別々の日に、学校から路線バスにのって落語を聞きに行った。バスの中で知らないおばあさんに「どこかに見学？」と聞かれて、よしこは「上野までみんなで落語を聞きに行く」。おばあさん「まあ、粋なこと」。……バスを降りると「先生、粋(いき)って何?」。「かっこいいっていう感じかな」燕路さんにそのできごとを話すと、「粋っていうのはね、こういうふうな落語をちよいと聞きましょうかねって、ぶらっとお出かけしてやることそのもの。…では、始めましょうか」

噺家さんは子どもたちに、まず、しぐさをよく見て想像することを教えてくれた。

「蒸かしたてのまんじゅう。うまそうだねえ。ちよいと割っていただきますよね。ほーら、あんこがこーんなに…」

落語はひとりで正座して扇子と手ぬぐいだけを小道具として話す話芸。子どもたちはその名人芸に、目の前にまんじゅうがあるかのように思いこみ、「あ、あんこが見えた」「食べたーい」と興奮。

落語は「聞く」のではなくて「見る」ものだよ、と教わる。目の動き、身体の向き、熊さんと八さんのやりとりは、確かに「見て」味わうもの。

まるで生きている八っあんやたぬきが、そこにいるかのように引き込まれ、笑いすぎで身もだえし、噺の世界にみんなで、はまった。

「噺す」というのは、その場にいる人(お客)の気配を敏感に受け止めつつ進めていく一期一会のできごとだ。ことばって、話芸って本当に奥が深くておもしろい。

小噺を教えてもらって帰ってきた。

それからは教室にカラーボックスで高座を作り、座布団にかわるがわる座っては落語遊びが始まった。

大晦日のおはなし

大晦日の夜、犬とねことねずみが話をしました。

犬が言いました。「あしたは、わんたんだワン」

ねこが、「わんたんって、ニャーに?」

すると、屋根裏で、ねずみが「チュいたち、チュいたち！」 (深々と礼)

文字で書くと何でもないが、これは何人やっても同じようにはならず、その都度可らしい。声の調子、大きさ、抑揚、間の取り方。そして話す時の表情、顔の向き。何回でも新しい笑いのツボが見つかる。笑いが進化する感じがする。子どもはつぶやいた「これ、ほんとに笑える!」。

あるお母さんから「知り合いに落語家さんがいる」という情報が届いた。小学校に来てくれるらしい。さっそく連絡を取る。三遊亭京楽師匠さんは、アメリカで英語で落語をやったり、手話やいろいろ新しいスタイルの落語を広めるなど、積極的に取り組んでいらっしゃる方。せっかくのチャンス、2年生の子ども達だけでなく保護者にも来て楽しんでもらおう、他学年にも知らせようというように、お客さんの輪が広がった。

このように落語を楽しんで数ヶ月。T男は、新宿の寄席におじいちゃんと出かけ「平林」を覚えることに挑戦し始めた。そんな子ども達の様子を伝えたところ、燕路さんが、教室に来てくださることになって、さらに新しい展開となる。

教室では、燕路さん「みんな落語の勉強すすんだそうですね、どれどれひとつ聞かせてもらいましょうかね」と切り出して「めったに貸さないんですけど、羽織を、ほら(すっと、脱ぐ)、(さっと、かざおに着せる) どうですか?」と、雰囲気盛り上げてくれる。

覚えてきた落語を一生懸命に話すT男。

うれしいことに、まわりからどっと笑いが起きた。

「うまいね。ところできみの一番好きな食べ物は何?」

「…ステーキ」

「よし、じゃあ、ここでステーキ! って思いっきり叫んでごらん」

「ステーキ!」

「そうだ、その声で、いってみよう」

噺家さんの楽しく的確なアドバイスに、T男もまわりも、学ぶことは大きかった。

技を教えるというのは、こうやって、ひとりひとりの状態をさっと掬い取ってほめて、よりよい方向をちらりと見せることなのだ。高みへの手がかりをちょいと示し、「あとは、考えてね」という引き際も見事だ。

そして、その日、「学んだことを5・7・5・7・7・にまとめてごらん」という私の要求に対して、子ども達はこう答えた。個々の学びは短冊に簡潔に表現された。

えんじさん 落語話の 名人だ
 いろんな話 頭につまる (ひろき)
 落語はね わらって楽しむ おはなしだ
 わらってころんで 今も昔も (ななこ)
 ももたろう ももではなくて 芋だった
 ばあさん食べて わらいとまらず (けいと)
 落語はね げらっとわらう おもしろい
 江戸時代から あるんだからね (ゆうき)
 えんじさん いっぱい落語 おぼえてる
 こわいはなしも おもしろすぎる (かずお)
 落語はね おもしろいけど かんがえる
 そのえんじさん 名人ですね (とみ)

4 思いやって育つ

…物語を読む～劇作りへ（3年生秋から冬）…

3年生の2学期、創造活動（総合的な時間）で課題別選択学習をした。約20時間。

学年全体（120人）が、昔調べ・夢の箱・ちょっと変わった自己紹介・劇・手作りタペストリーの5つのテーマに希望ごとに分かれた。テーマは担任4人が得意分野を話し合って、子どもと共に創るならこれだというものを出した。私は劇を希望して担当。学年協力担任制を生かし、学級ごとの壁をとりはらう。課題選択のねらいは、子どもの意欲を尊重して同じ目的をもつ者どうしで協働して何かを創り出そうということだ。

私は、劇をやってみたいと集まった38人と話し合った。

「どういう劇にするか。内容から話し合って作っていくか？それとも、台本をもとにやっていくやりかたにするか？」

「発表するかどうか？」

「うまくいったら、お客さんに来てもらう。うまくいかなかったら、発表しない」

「もし、発表するとしたら、そんなに時間ないから、台本を利用した方がいい」

3年生は、学校生活の流れが分かっているから、現実的に考えることができる。12月初めごろに発表するとして1ヶ月くらいしか時間はないから台本からすべて創っていくのは無理と判断する力がある。私も「体育館の舞台を使うことは可能。」「週に2～3時間しか練習はできない」と口を挟んだ。台本はどうするか。図書コーナーの演劇の棚などをみんなで見たが、これだというものはない。

「おひさまパー、雨がチョコキなら風はグー」（成城学園劇の会脚本より）を私が提案した。

森の中で、風の子とお日様の子と雨の子が「どちらが強いか」とけんかをした。からからに干上がった、びしょびしょになってカビがはえたり、風に吹き飛ばされたりして森の動物たちが困り「これじゃー生きていけないよ！」。最後には「みんな強くて弱いよ。グーチョコキパーみたいだね」と仲良くなるお話。

Y男の変化を追ってみよう。

〈物語を読む段階〉

Y男は読む力があまりないので、文字をゆっくり追うのが精一杯、みんなの音読みのスピードについていけない。

17ページもあるので、自分で最後まで通して目で読むことができない。せりふごとに順番に（誰がどこに当たるかわからない）役割読みをするときも、目は台本を離れ、きよろきよろしてしまう。だから

自分の番になっても、もうどこを読んでいるのかわからなくなって、隣の子に「ここだよ」と指さしてもらって、やっとのことでたどたどしく小さな声で読む。

全員で全体を3回読み通して、だいたいストーリーをつかんだ。

(Yは劇がやりたくてこのグループに来たのだから、台本を読む段階で大変でも、いやになったりはしないだろうけど…)と、私は心配になりながら「家で、もう一度ゆっくり読んでごらんね」と、言った。うなづいていたが、実行したかどうかはわからない。

〈配役を決めていく段階〉

通して読んでいるうちに、多くの子どもはやりたい役どころのイメージができてきて、あれこれ希望を言うようになった。「雨の子がいいな」「ウリボウにする！」など。

そこで、まだ固定はせずに、やりたい役の所を毎回自分で決めてそれぞれ読んでいくことにする。

Y男は、どうだったか。…参加しないのだ。いや、できないのかもしれない。目で文字を追って行けないから、読み担当場所が次々変わる流れに乗れない。

2回、3回、読み合いながら進む。役を変わってみていいよと言いながら、役割読みを繰り返す。(いつ、加わるか?)期待しつつ心配しているがまだだめだ。

ただ、自分で文字を見ていない代わりに、友だちが入れ替わりに読んでいく展開を楽しそうに聞いている。教室のあちこちから声が飛び交うので、あっちを見たりこっちを見たり、声のする方に顔を向けて、物語の世界を、外野席にいるけどゲームを楽しんでいるような感じで楽しんでいる。すじは頭に入っているのかもしれないな…と、思う。読む子はもうすっかりその気になって読んでいるから、役ごとに「らしさ」が出てきて、聞いていて何役が何をしているところなのか、動きが見えるようになってきている。

隣のG男が、こそつと言っている。「Y、何やる?」。G男は、Yが読みに加わっていないことを知っている。Y「……」。

私「Gは、たぬきだね?」(さっき、そこをうれしそうに読んでいたからわかる)

G「うん!」

私「Yは、まだ、迷ってるみたいね?」

Y「……たぬきでいいよ」

私「で、いいよ、じゃなくて、たぬきがいいよ、なら、いいけど」

Y「たぬきが、いい」

G「たぬきにしようぜ!」

Y(にっこり)。私もにっこり。「じゃあ、もう一回、みんなで読んでみよう」

勝手に、やりたい役になって読んでいると、たとえば一匹のリスのせりふを3人で言うようなことになり、速さや間の取り方が微妙に違うので、当たり前のことだが「やりにくーい!」「一緒じゃ、かえって読みにくい」という意見が出てきた。

「そろそろ、役決めしようよ」「そうだそうだ」ということになる。

〈役が決まって、舞台上で動き始める段階〉

「風の子やりたい人?」「はーい」というように、希望者優先で決めていく。8つの役があるが、人数はばらつきがあっても大丈夫なので、ほぼ希望したところに決まる。

その日Yは風邪で欠席だった。困ったなと思っていたら、「たぬきだよ、このまえそう言った」と、まわりが知っていて、一応そういうことに決定しておく。

いよいよ体育館の舞台上で「動き」を入れていく。今までは読みながしていたト書きが重要であることに、ここで気づく。せりふそのものは台本を見ないで言えるようになっていた子も、「しもて(下手)から出てくるって、どっち?」「あっちだ!」「走って出てくる、だって!」などと確認。行動を伴うようになってはじめてト書きの存在を意識したということ。「読みとり」が、からだの必要に沿って深くなる。

Yは、3人のたぬき役のうちのひとりとして、舞台上に駆け上がったところまでは良かったのだが、「あわてて、たいへんだ、たいへんだ」と言う。「えー？その「あわてて」っていうのは読まないんだよ」と、隣のたぬきに注意されている。ト書きなのだ。

あれこれ「こうしたほうがいい、ああしたほうがいい」と考えを出し合いながら、数回、舞台上で練習した。

とうとう、みんな台本を持たなくても、動きがスムーズにつながるようになった。ことばも自然にやりとりできるようになった。Yは、教室では聞いたことのないような大きな声で、からだも強張りなく動くようになった。

1年生、2年生、最後に保護者の皆さんを招待した。観客が反応してくれることで、その都度、子ども達はぐんと成長する。特に、お客さんから笑いが湧いたとき、舞台上で、子ども達のからだと声が「より、よく届かせたい」気持ちにふわっと高まるのを感じる。それはほんの一瞬にしても、お客さんと「つながった！」という快感であり、たぶん演劇の醍醐味なのだろうと思う。

その後、冬休みになる直前、三越こども劇場に、劇団「円」の「つるのおんがえし」「ごんぎつね」ミュージカルをみんなで地下鉄に乗って観に行つた。ほんもののすばらしさを、またひとつ、心に刻む体験になった。

〈そして、クラスで〉

3学期になった。前回、劇をしなかった子から「私たちもやりたい」と要望が出る。そこで、今度のことばの時間に学級全員で取り組んでみることにする。

同じく成城劇の会の「野原はみんなのパラダイス」の台本を使わせていただく。

「野原はみんなのパラダイス」のあらすじ

チョウやみつばちが色とりどりの花が咲く野原で楽しく蜜を吸っている。うっかりクモの巣にひっかかったテントウムシを、心優しいくも吉は逃がしてあげるのだが「食べようとした」と誤解され「クモの巣なんか、きらい、出ていって」と嫌われる。そこへ、地上げ屋稼業のくも助一家がやってきてもく吉になかまに入るように迫る。やはり野原を独り占めしたいカマキリ軍団との戦い。やがてもくも助一家も改心し、くも吉への誤解も解け、かまきり軍団とも和睦。「みんなで野原を守っていこう！」心を合わせたみんなの歌と踊りで終わる。

二学期の選択学習で劇をやった子がリードする。初めて通して読んだときはたっぷり40分かかった。台本が22ページもある。ボリュームがある。難しいかな？でも、ふだん本を読まない男が、休み時間に一心不乱に読んでいる姿を見て、(何の役をやるのか考えているのだろうか)挑戦するのもいいかもしれないと思う。

ところがここで、インフルエンザが流行し私も高熱で3日休んでしまった。

やっと動けるようになって学校に行くと、何と、E男があっさり言うではないか「もう、役、決めたから」「えっ？どうやって？」「やりたい人が重なったのは、オーディション」。

啞然とする。どうやって決めたのか尋ねると、テントウムシ希望者が前に出てせりふを読んで、いいなと思う人に手を挙げて、多い人に決めたそうだ。「もめごととはなかったの？」と思わず聞くと、「うん、何とかだいじょうぶ」

担任の私がいないうちに、全部の配役が決定した。オーディションは、結構きちんとやったと言う。E男は、2学期に劇をやっている。「じゃんけんで決めるより、ちゃんとその役にあう人をえらぶべきだ」と主張したらしい。もっともなことではある。オーディションという方法を生み出し、先生が不在でも何とかみんなで実行していったのが何だかすごい。

隣のクラスの先生に聞いてみたら、「ああ、何だか、一生懸命みんなでやりましたよ。そんなに大騒ぎはなかったですよ」。私が「びっくりした」とつぶやくと、「えっ？そうなんですか？「役を決めておくように」という指示が先生からでていたのだとばかり思いましたよ」

さて、読み合わせから立ち稽古に入る。R子の場合を追ってみよう。とにかくおとなしい。授業中に発言はほとんどしない。積極的な言動はあまりみたことがない。友だちといざこざを起こすことはないが、何かトラブルがあっても自分で何とかしようとしなない。そのR子が、ソロで歌う場面もある、くも

吉の妹に立候補してなっている。それが、そもそもの驚きなのだが、何か気持ちを感じる。

「速すぎる」「声が小さい」「何言ってるかわからない」、子どもははっきりものを言う。この劇は学芸会があるからやっているわけではなく、発表のために練習するのではない。みんなでよいものを協力して創っていこう、もし、誰かに見せなくなったら見せよう、そういう出発をしている。だから、子ども達はどんどん「文句」や「良いところ」を指摘しあう。その意見交換に目的がある、ということを知っているから。

配役が決まって子ども達は着るものを迷うことを楽しんでいた。わざわざ衣装は作らないから家にある服でいい。スズメバチは黄色っぽいシャツ、カマキリは緑というように相談していた。R子は、たったひとりのくもの女の子。相談するなかまがないからだろうか、何を着ていいか決めかねている。

「何の役なのか（くもの女の子であるということ）が、それじゃわからない」

ずばっと言われた。泣き出すか？……。泣かなかった。でもからだは固まっている。

私は「くもの特徴を出すのは難しいね。どうしたらいいかしら？名札でもつけてみる？」

R子は、次の日、丸いボール紙に（くも子）と書いて黒いTシャツの胸につけてきた。回りの反応は、いまいちだ。「たいへんだよね。」「でも、自分を捨てなくちゃね！」と、仲良しのC子は励ますように言った。劇のなかで〇〇らしく役になりきるということは、子どもにとって、いつもの自分と違うものになってみる体験だ。その「違うものになる」体験をすることによって、その苦労を自分もすることによって、お互いに初めてお互いへの思いやりが芽生えたのだろうか。

互いに互いの苦労を理解し、共感する。それは口でいうほど易しいことではない。

劇を創るみちすじで、他の立場になってみる体験をめぐり、そこではじめて気づいたのだ。思いやることはいっしょに悲しむことに似ている。でもそこに止まるだけではなくて、どうしたらいいかいっしょに考え、明るい方向を、手がかりを見つけ出すことなんだと納得したのに違いない。

R子は、とうとう最後までソロの歌声は大きくはならなかった。でも舞台の袖にいる友だちにバックコーラスで支えてもらうことで、落ち着いて役を演じることができたのである。

3学期の終わり、春風が吹くころ、劇はできあがった。お客さんにたくさん来てもらって、大成功だった。音楽の先生に教えてもらった歌に、自分たちで振り付けを考えて踊った。台本のせりふは、どんどん言いやすく直し、言い換えられ、すっかり自分たちのものになっていた。

5 人に育てられる

…「老いを見つめる」ことから（3年生冬から春）…

多くの子どもにとって「老い」は遠い問題である。ただ、祖父母と同居あるいは近くに住んでいる子は40人中16人おり、最近、祖父母の死を体験した子も数人いる。

私自身、生みの親と同じように結婚以来たくさんのかんことを教えてくれた義父母を、昨年80代で相次いで亡くし、老いることを切実なものとして、でも哀しみだけでなく「今、できることは何か」という気持ちで考えるようになっていく。

「老人とは何かができなくなる人」というマイナスイメージを乗り越え、人のかけがえのなさ、共に居ることから学ぶものの大きさを知り、生きて歳を重ねていくことへの夢を少しでも育てられたらと思ひ、このような単元を組もうと考えた。

① 学びの始まりをいざなう

おじいちゃん、おばあちゃんに尋ねたいこと、「タネ」を探す。つまり祖父母に聞いてみたいことをノートにたくさん書き出す。ゆっくり静かに時間をかける。

「おじいちゃんに尋ねたいこと」「おばあちゃんに聞いてみたいこと」などを自分の心に、まず形づくること。それがささやかなものでも貴重だ。興味の発掘をていねいにする。

（子どもの疑問例）

どこに住んでいたか・ペットはいたか・洗濯は？

戦争のこと・服装のこと・暖房は？

テレビが始まったとき・私のママはどんな子だった？

1日の暮らし・昔と今で変わっていないことは？

学校のこと・成績のこと・好きな人はいたか？

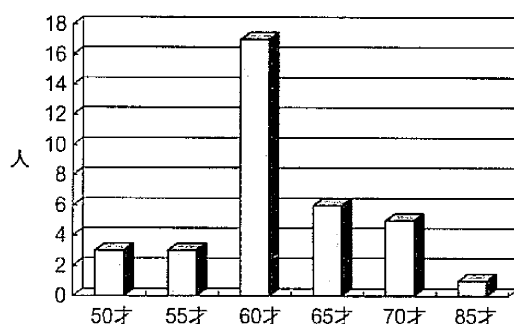
はやっていた遊び・習い事は？

生きていて一番うれしいこと

今までで一番災難だったこと など。

② 子どもの持っている「老いのイメージ」を調べる

(一) しらが・虫歯・めがね・つえ・車いす・ほけている・耳が遠い・こわい・腰が曲がっている・体力がなさそう・ゆっくり歩く・病気がち・何もできない・いばる・がんこ・どっこいしょと言う・世話をやきすぎる・心臓が弱い・声がしおれている



(+) やさしい・おもしろい・いろいろなものを買ってくれる・孫をかわいがる・心強い・戦争のことを見て知っている・あたまをなでしてくれる・風呂が好き・迷惑をかけたくない・一緒にいると気分がよくなる・昔の話がじょうず・のんき・友だちがいっぱい・日本のたべものが好き

子どもの、学習を始める段階での「老い」のとらえ方が、人々との新しい出会いによってどんなふうになるだろうかという問いが、私自身の単元開発の動機だった。

しかし、近くの区立図書館で探したり本屋さんで買ったり。いろいろ読んで考えているうちに、違う世界が見えてくる。あれもこれも、学ぶに価値あること。エイズの写真集も教材になるし、一人暮らしや福祉も考えたいし、戦争も取り上げたいし、命をテーマにするならたくさんの方のアプローチが考えられるし、死に正面から向き合うことにも挑戦してみたい。でも、実際に、教室で、あの3年生の子ども達とはどのように展開できるだろうか。どう展開するのがいいのだろうか、さんざん悩む。

「老い」に焦点を当てるといふ決心だけはあるのだが、どこへ向かうのかが見えない。方向がありすぎて迷う。どこへ向かって、大切なこと、学ぶべき真実がある、それほど「老い」をめぐる問題は広く深い。

学習の行く先、単元の結末の予想がつかない私の迷いをよそに、子ども達は祖父母から聞き取りを始めている。もう学びは動き始めている。

やはり、子どもが教室に持ち込むものを大切にしよう。未知の山の中で、流れの源の地点を決めたのは私だが、そこを掘って水源の手ごたえを感じ、水を流し始めるのは子どもなのだ。その子その子なりに「老いをみつめる生活から生みだすもの」を楽しみに待とうと、やっと私は決心した。

③ 「1枚研究」とは何か

この子ども達は、1年生の夏頃から、ひらがなよりも絵が多い頃から「1枚研究」に親しんできた。

B4の画用紙を半分に折って、左側に折り目を置く。最初のページは「表題」と「目次」。紙をひらいたところの2ページが、「内容」。最後のページの使い方は自由に工夫する。

画用紙1枚で、自分の説明したいことを、読む人(クラスのなかま)にわかりやすく考えてまとめるしごとなので「1枚研究」と呼び慣わしていた。

学校生活のさまざまなできごとの中で、何かことある事に数時間の時間をとって、自分のことばで説明するいとなみを繰り返したのである。そして、紙にまとめたものを読みあう体験を心がけた。

1年生 お気に入りの動物や虫をしらべる（夏から秋まで）

おたまじゃくしや、モルモットなど、身の回りの生き物をかわいがりながら、写真なども使って、発見したことや本で調べたことなどを書く。

2年生 今、興味のあること（6月・12月の2回）

テーマは自由。料理や電車、石や恐竜などさまざま。家の人との協力（博物館に行くなど）も大切に。作品がたくさんになったので、ボックスファイルに「テーマ」（子ども達と相談して決めた）ごとに整理。誰でも、いつでも、手にとって読めるようにしてある。

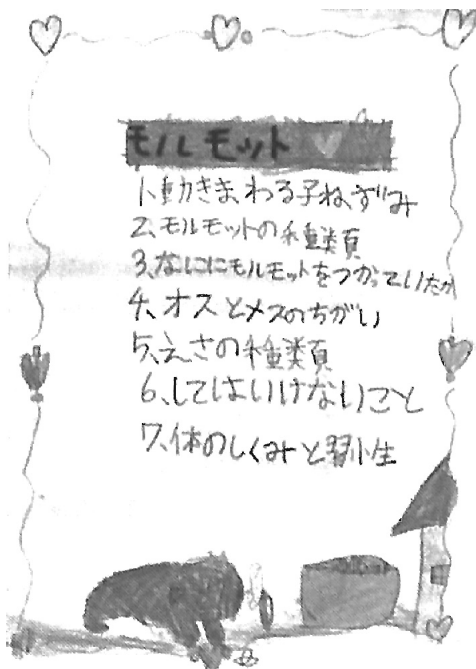
3年生 自分の得意なことを説明しよう（6月）

一輪車、サッカー、野球、お菓子づくり、楽器など、自分が好きでよくできること、あるいはできるようになったことを、それを知らない（苦手な）友だちに説明するとしたら、どう書くかを学習した。

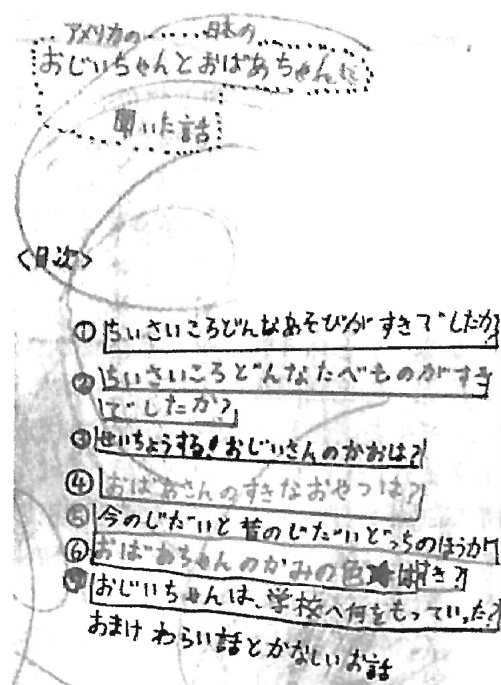
祖父母に聞いたこと（1月）

お年寄りから学ぶことを意識させようとして取り組んだ。これが、今回に当たる。

<2年生の時の作品>（表紙）



<3年生の時の作品>（表紙）



「1枚研究」は各自の家に持って帰ってしまうのではなく、教室に文化財として置いている。子ども達は、友だちや、一つ年上のお兄さんが作った本などをとても興味をもって手に取る。子どもの目線でまとめられたものなので自分の興味あるテーマに近いと、食い入るように読む。現在、教室にある1枚研究の枚数（冊数）は、200冊以上になっている。

④ 自分の祖父母を対象にした「1枚研究」をめぐる学びの履歴

<もりおの場合>

ノートに「おばあちゃんの小学校のころのことを聞きたい」と最初に書いていたもりおは、さっそくその日のうちに取材してきた。

小学校での遊びや、給食がなくて日の丸弁当だったことなど。

おばあちゃんは小学校1年生の入学のときのテストで、国旗をかきなさいと先生にいわれて、日の丸をかきはじめました。ちゃんとかいたつもりがだめ。どうしてかというと、旗の棒の上に金の玉をかくのをおぼれたからです

これを聞いた学級のなかまからは「えーっ」という声。

「どうしてですか」「そんなことぐらいで…」という反応のなかで、ふと「戦争ちゅうだったからじゃないの?」という考えが出た。その場はそこまでだったが、〈戦争〉というキーワードが心に残る雰囲気になり、「祖父母にインタビューしたいこと」の中にその話題が増えるようになる。もりおは、今度は戦争のことを、おじいちゃんに聞いてくると言った。

そして、1枚研究を取材する相手ごとにもう1枚、もう1枚と重ねていくことになる。

〈まさしの場合〉

おじいちゃんに聞きたいことはずばり「せんそうのころのはなし」。

おじいちゃんはせんそうのころ、中学をでたらすぐに工場にはたらきにいった。てっぽうを作る工場だった。だが、その工場はせんとうきのばくだんでこわれた。ふつうの人は「いなかや山おくとか海べ」ににげていった。土をほって、そこにもぐる人もいた。おじいちゃんは文京区のお寺にいたから、せんとうきがきたら「ほとけさま」を土にうめた。学校のノート教科書も土にうめてたけど、ぜんぶもえていた。

今も文京区に住んでいるまさしは、おじいちゃんがいたというお寺にも行って来た。焼けて建て直されている。1枚研究の紙に書かれたまさしの字は、いつもよりずっと細かくていねいで、強調したいと思う言葉はしっかり赤鉛筆で書いてある。お寺の地図も、場所がよくわかるように書いてある。

「山奥とかに逃げていったというのが、そかいだって」

「そかい?」

そこで、学校ごといなかに引っ越して行ったことなど話をする。かずこは、「そかい」について聞いて次のように書いている。

〈かずこの場合〉

おばあちゃんは、京都に住んでいて、となりの大阪によくばくだんがドッカーン!っていっぱいおちて、ばくだんの音がよく聞こえた。そのばくだんのけむりが京都の空をかこんで、京都の空ははい色になった。でも京都には、ばくだんがおちなくて、そかいをしなくてすんだ。

私は、附属小学校の同窓会にある「疎開の会」の方に来ていただいて、このあたりでそこに焦点を当てようかな…とも、一瞬考えた。やればできるとも思う。きっと子どもたちは戦争中の話に耳を傾けるだろう。

しかし、待てよ?その機は熟しているか?

まだ、それぞれ自分の祖父母への聞き取りが進んでいない段階で、「戦争」や「疎開」などの流れを掘りすぎてもいけない。もっと小さな流れが広がる方がいい。

深めたい気持ちをこらえて、私は、次を待つ。

〈たかゆきの場合〉

彼の1枚研究の最後のページに、おばあちゃんからメッセージが書いてある。

ちょうど、たかゆきの年齢でした。

戦争が終わったと、ラジオから流れる天皇陛下の言葉を聞いて、子どもながら良かったと強く思いました。今でもよく覚えています。戦争はこわいです。これからの日本が心配です。戦争は絶対反対です。 綾子

たかゆきは、元気一杯の男の子。戦争中の食べ物のことを主に取材している。そして「おなかいっぱい食べられるから、今はいいな」と言う。きっと、おばあちゃんは、たかゆきといろいろ話しながら、お芋やかぼちゃの話をしながら、これを書いてくださったのだろう。

最後のページに、祖父母からの一言をもらってくる子が増えるきっかけとなった。

<ゆかの場合>

おじいちゃんのことば

食べ物がたくさんあり、科学が発達し便利な世の中になりました。科学を戦争に使わないで、世界中の人が、いつまでも平和にらせるように、若い人をお願いします。

ゆかより

おじいちゃんを、これからも、たいせつにします

過去の戦争の体験は、お年よりみんなそれぞれ違うものとして心に身体に残しておられる。私は、子どもたちが教室に持ち寄る「おじいちゃんの戦争のころの話」「おばあちゃんは何をしていたか」などを聞いたり読んだりしながら、やはりこうして血のつながった人から聞くことの重みを感じる。

子ども達のことばから、小さくても大切な発見がいくつも浮かばれる。

「いろいろ聞いていたら、おじいちゃんの性格が私と似ていることに気がきました」

「いつもがみがみいうのに、やさしいおじいちゃんになりました」

「おばあちゃんが、おかあさんを生んだころの写真を見たら、かわいかった」

「(おじいちゃんが) ぼくだんがおちたとき死んでいたら、今のわたしはいなかったのでしょう」

石川県羽咋郡の小学校に勤務している石谷克人先生とは、今まで何回か「子どもの手しごと」の作品をやりとりしている。学校間通信である。

よその地域、学校の子どもが調べてまとめたものなど、子どもたちは非常に興味をもって読む。自分たちの生活にはない、あちらの生活にあるものから刺激を受ける。お互いに、そういう学びの交流をすることには、世界を拓くのにとても大きな価値がある。

今回も、石谷学級で今までに子どもたちが取り組んでまとめた「高齢者問題に関する本」を宅急便で送っていただいた。

地域の「一人暮らしのお年より」との、ひとりひとりの温かな交流が子どもの視線でまとめられている。私の学級の子どもたちは「一人暮らしの人」との出会いは今のところないけれども、届いた手作りの本(アルバム)を見て「すごいね」。ていねいな本の作り方を参考にする。

<たかしの場合>

たかしは「おばあちゃんの二十歳の写真を借りてきた」と、うれしそうに見せてくれる。彼はあまり書くことが得意ではないが、いつになく意気込んで書いている。

しゃんを見て、ぼくが「きれいな人だな」といったら、おかあさんが「おばあちゃんはじょううさんだったのよ」といいました。ぼくは、びっくりしました。

もちろん、みんなもびっくりして「どれどれ見せてー」と大騒ぎになる。
祖父母の小さい頃、若い頃の写真を借りてくるという方法が、はやり始めるきっかけとなった。

〈みゆきの場合〉

ちょっとおませなみゆきは、最初から「おじいちゃんのプロポーズはどんなか、聞いてくる」とか「好きな人はいたか」など質問したいこととして書いていた。同居しているのですぐ答えてもらえてよかったと言いながら、報告。

おじいちゃんは、けっこんするまで、顔をみたことなかったそうです。ちょっとわたしにはしんじられない。でも、けっこんしてよかったそうです。今はしあわせ？って聞いたら、おばあちゃんは「まあね」と言っていました。わたしのおかあさんが生まれたときはすごくうれしかったと言っていました。長生きしてほしいです。

一緒に住んでいないので、電話で何度も聞くから大変なんだと言う子もいる。電話したら福岡のおじいちゃんは風邪ひいていてだめだったと、取材の苦労話も出る。

〈けんの場合〉

けんは、昔の道具について興味があり、洗濯板・七輪・火鉢・炭を入れるアイロンなどについて、詳しく聞いて絵を描き、説明を書いてまとめてきた。とてもおもしろくて、みんな引っ張りだこで読ませてもらう。最後にこう書いてある。

ぼくが、おばあちゃんから聞いた道具の話は、ここに書いたほかにもたくさんありました。かつおぶしけずりの話が一番おもしろかったです。かつおぶしけずりはみたことも使ったこともないので、一度使ってみたいと思いました。お父さんに聞くと、お父さんは子どものころ、朝のみそ汁のだしをけずったそうです。ぼくはちょっぴり昔に行きたくなりました。

子どもひとりひとりの興味の向きが違うから、こうして、持ち寄ったものの楽しみ方が広がる。そして、どの子も、友だちの書き方・まとめ方にまた新鮮な興味をかきたてられていく。

〈いくみの場合〉

「アメリカのおじいちゃんと日本のおばあちゃんに聞いた話」という表題。アメリカにいくみがメールで質問を送り、おじいちゃんから英語のメールや写真が届いて、うれしそうに持ってきた。英語はいくみの力で日本語に訳すことができた。その一部分を紹介しよう。

- Q おじいちゃんは学校に何を持っていった？
A 黄色いえんぴつ。すぐに練習ができるように！
のうみそ。考えるために！
さいごに、かっこいい顔。女の子のために！
(写真を見れば女の子のための、かっこいい顔がうつっているよ)

おじいちゃんの若い頃の写真を見て、いろいろな話が次々とわき出てくる。
楽しい発見。
でも、中には、やっぱり年をとることをこわいと思う子もいる。

〈ゆういちの場合〉

なんか、これを作っていて時というのはふしぎだなーと思いました。というのは、人は時がたつと、年をとってツルツルのはだもカサカサのはだになったり、まっすぐしたせなかが、グニャリをひんまがって、歩きにくくなったりしてしまいます。自分も時がたつとああなってしまうと思うと、つい身ぶるいしてしまいます。

年金の話題も出てきた。

〈ひかるの場合〉

年金というものは、実を言うと、65才からで、給料を少なくして早めにもらっているそうです。もらっている金がかくは約8万円だそうです。
(そういうこともありなんだなー！)

「ぼくも、おとなまたは、おじいちゃんになったら、孫にこんな質問されるのかな。」という感想には、吹き出してしまった。

このように、全員が祖父母からの聞き取りを経験するのに約2週間かかった。

⑤ ライフプランニングセンターの方々との出会い

子ども達の「年をとった人との対話」の体験を聞きながら、そろそろ、「お年よりの今の幸せ」に焦点を絞るほうがいいと、私は思った。

なぜなら、たかゆきの質問「おじいちゃんは、今と昔、どっちがすきですか？」に対して、おじいちゃんは「今がすき。つらいこともあったし、楽しいこともあった。」たかゆきは、それを受けて「おじいちゃんは、今が一番楽しそうにしていると思いました。これからも元気すがたでいてほしい」と書いている。

肉体的には老いても、精神は老いていないということがある。今を楽しく思う気持ちには若さがある。「老い」を見つめることで、見えてきたのは、「老いない心」。

昔話を聞いて、さて、これから先に生きていく子ども達の糧になるのは、昔と今を土台にした、未来へのポジティブな意思、心のありようなのだ。

かくして学びの展開のイメージがはっきりしてきたので、思い切ってライフプランニングセンターに電話してみた。聖路加国際病院の日野原重明先生が2002年に設立された新老人の会。「75才から始めよう」という趣旨に尊敬の念を強く持っていたので、実践に協力してもらえたらうれしいと思う。私の希望を話したら、快く相談にのってくださると言う。放課後、指導案を持って出かけた。

〈特別授業〉 「世代をつなぐ」新老人の会会員の方と共に

テーマ 土井荘助さん「世界の人と話そう」(外国語や外国の風習)

小島亮一さん「バイオリンで、どんな楽器」(演奏も)

今井一幸さん「おじいさん、おばあさんに絵手紙をえがこう」

3人の先生(みんな75歳以上)が小学校に来てくださった。長いこと仕事や趣味で培われた力を、子どもたちに伝えてくださる。

子どもたちが配膳して、いっしょに給食を食べた。それから3つのグループに希望ごとに分かれて授業が始まる。土井さんは世界各国のあいさつや、実際に見た変わった風習を、言葉だけでなく身振り手振りで教えてくださる。子どもたちは真似する。小島さんは、バイオリンができるまでを写真で説明した後、実際に演奏。子どもも演奏させていただいた。今井さんは、自分の好きな思いをイラストに込めて世界でたった一つの贈り物、絵手紙を描く。子どもたちはアドバイスをもらってできばえに満足して

いた。

今井先生の授業で学んだこと（しんや）

絵は字がなくても、今、思っていることをかけば、理解してもらえる。
だから無理に字を書かなくても手紙が書ける。
上手下手を気にしないでかいた絵は、今までで一番うまくかけた。

外国語が堪能な土井さんから、その日の夜にメールが来た。

浅川先生
実は黒板を背にして立って皆さんにお話するような形を想定しての頭の中でのリハーサルでしたので、同じテーブルで話すことで最初はアドレナリンの分泌が強く、トンチンカンになりそうでした。（やはり子供達に話すには技量（伎倆）が必要だと感じました。先生が傍に来られて、生徒と一緒に言うようにとされて、なるほどと思いつき何とかやりかたがつかめました。（指での数の数え方や洗面のやり方の違いなど）
子供達の興味のあることを話す、質問に答えて話す、と、知識の伝達では全く次元が違うものだと感じました。（後略）

私の返信

土居 荘助様
昨日は、子どものために貴重なお時間を作っていただき、ありがとうございました。小学校のにぎやかさに驚かれたことと思います。お疲れにはなりませんでしょうか。
土居様のお話を聞いて、子ども達は「知りたいこと」が湧いてきたのでしょうか。
聞きたいことが新しく心の中から生まれてくる…というのが、お話を聞いて学ぶ際のキーだと実感しました。
「質問！」というかたちで出てきたのは「学ぼうとする力」だと思いました。

新しい出会いが、新しい意味を、織り成すように創り出していく。教えることと学ぶことが双方に起こることを実感する。

新老人の会の方々、子ども達のお礼の手紙に対して、ていねいな返信をまたひとりひとりに書いてくださった。それを受け取ったときの子どもの驚いた顔が、また、私には驚きだった。「え、私に？」「これを？」……なるほどそうか、と思う。

学校の先生は、なかなかこんなふう「個」に封書で秘密にことばを返したりしない。学びが、みんなのなかで進むように見えて、ひとりひとりのものであるということは、こうして個々に「あなたには、これを」と手渡していくことの積み重ねなのかもしれない。手渡された自分へのメッセージを、うれしい！とありがたく思う瞬間が、次の学びの流れを決めているのかもしれない。

そして次に、新老人の会会長、日野原重明先生が、半日だけ時間が空いているのでと教室に来てくださることになる。財ライフプランニングセンター「新老人の会」事務局長の岩清水由紀子さんと、同じく健康教育サービスセンター副所長の平野真澄さんのおかげで、その計画が実現した。

日野原先生とは、会議の合間をぬってライフプランニングセンターで1時間ばかりお話した。

「New elder citizens」として在ること。「don,tではなく、let,s do」の教育へ。

先生のおっしゃる言葉は、ひとつひとつが私の心に染み入る。「生きていることの質」を思う。

「子どもには、命を、心臓の鼓動を聞かせることだよ。一番よくわかるんだよ」

先生のひとことで、授業の進め方の世界がまた新しく広がり始めた。

そして、日野原先生の特別授業が行われた日の夜、私が友人に送ったメールがこれである。

さて、日野原先生は高速道路の事故渋滞に巻き込まれて、授業開始に間に合わず、私は子どもたちの「1枚研究」(祖父母から学んだこと)を次々と話題にしながら、(内心はすごい動揺!)到着を待ちました。参会の先生方からは「そのときの子ども達のことばがおもしろかった。自分のことばで自然な豊かな会話が成されていた。もっと聞きたかった」とコメントをいただきましたが、私の心臓は止まりそうでした。

20分くらいたって、日野原先生が息を切らせながら登場。さっそく、呼吸のこと、息をしないと脳が3分で死ぬこと、から話し始めて、心臓の模型を見せながら鼓動を聴く活動に入りました。何百人もの先生に取り囲まれてしまっているのに、服をぬぐこともままならず、聴診器をじっくり楽しむことはできなかったのが残念です。

先生が教室におられたのは30分くらいでした。

先生が「命はどこにあるか」と問われて、子どもが心臓や頭を指さしていたのに対して「そう、命は脳にある」とおっしゃいました。脳死の問題ともからめて。

先生は子ども達に伝えたいメッセージをはっきりお持ちでした。(後略)

⑥ 命の鼓動を聴いた日の、子どもの学び

人間の心はぼくは体の中全体にあると思いました。(ひろし)

命ってそんなに大切だったんだなあ。もし、私が生まれていなかったら、私の体も心もなかったでしょう。(はなこ)

ぼくは、今日学んだことで一番こわかったのは、人間の命は底があること。ぼくが年をとったら、子どもに命のことを学ばせてやりたい。(けん)

ぼくは、命は大切だということはわかっていました。でも、命をどう使うかなんて、9年間一回も考えていませんでした。命を大切に使うことが一番だと思いました。さくら君の心臓の音を聞いて、ちょっとこわかった。(まさと)

年をとることは、とても大切だなと思いました。ぼくは将来、日野原先生の言葉を頭に入れてお医者さんになりたい。友達の子の心臓の音を聞いてみたら、ドックドックとはやく鳴っていて、わあーと心で思いました。お年寄りを大切にしないといけないとは、こういう意味だったんだなーと感じました。

(けいいち)

牛の心臓は人の心臓の4倍ぐらいありました。でも、人は言葉が言えるし2本足で立てるのがすごいな。心臓が大きいから長生きできるわけじゃない。ぼくのおじいちゃんおばあちゃんにも長生きしてもらいたい。(るい)

3分以内に助ければ命が助かると聞いたのははじめてです。(ゆり)

私は生きていたことのうれしさを感じました。心臓が今、私の中で1分間に80回から100回もうつつなんて。あんまり長生きしてもつまらないけど85才ぐらいまで生きたい。(まり)

100才まで生きると4億回も心臓がうつということにびっくりしました。

「心臓は時計のような物だな」と思います。その時計が止まると人間は生きていけません。だから命の時

計です。私の命の時はいつまでもつか。(かな)

私は子ども達の書いたものを読んでいて、「死」へ子どもの思考が届いていることを感じ取った。その手ごたえは、ある物語を思い起こさせた。

(あらすじ)

かわいがっていたネコが死に、庭に埋める。さびしくて悲しくて何も手につかなくなったほくにお母さんは言う「お葬式ではバーニーのいいところを10こ思い出してごらん」。9つはすぐ見つかるが、あとひとつは何だろう？ ほくはお父さんにうながされ庭いじりして、土のなかの見えない種から草や花が育つことを教わる。そうだ、今バーニーは花を咲かせるお手伝いをしているんだ！ちっちゃなねこにしては、これはたいしたことなんだよ…。

悲しみを乗り越えていく男の子の成長、命のつながり、輪廻に思い至るさまがよく描かれている物語だ。これを次の授業ではみんなで読むことにした。

⑦ 死とは？

「ほくはねこのバーニーが大好きだった」東京書籍3年生国語(下)を読む～子ども達のまとめ

死とは、その人がその人である最後の一生だと思えます。その人は天国へ行き、また生まれ変わる。それが続いていく。でもそれは、人間だけでなく、動物もみんなそうだろう。私もいつか死に、おじいちゃんも死ぬ。おじいちゃんの話によると、戦争でたくさんの人が死んだが、自分は幸運で死ななかったという。死を粗末にしない。(みゆき)

死については、まだ、よくわからないけど、死ぬということは、階段を一段のぼったことかな。(ひかり)

死ということは、いつおそってくるかは、わからない。だから、子どものころ遊べと母がいうのがよくわかる。大人になると、子孫がその力をうけつぐから、いつ死んでもいいという勇気があるのかもしれない。ほくは長生きしたいなあ。(けんいちろう)

私のおばあちゃんは病気で死んじゃったけど、ねこのバーニーみたいにはなれないと思った。(焼いてしまったから)(りり)

父母はほくにこう言った。「死んで土に入ってもどこかで元気にいる」。ほくは人ひとりの命の大切さがわかった。ほくが死ぬと、草や木を育てるなどいろいろなことをするのを思いました。(ひろし)

お年寄りをいろいろな事ができないと思いがちだけど、私はお年よりにだからできることがある、と、思いました。(まり)

人は必ず死んでしまうもの。だけど人生たった一回だけ。だから大切にしないといけない。老人になっても楽しくする。じっとしているより、動いたほうがいい。この勉強をしてよかった。(あやこ)

私は死んだことも、年をとったこともないけど、老人を見ていると、これからの人生がわかるような気がする。(みさこ)

なぜ心臓って止まるの？

なぜ死ぬの？

日野原先生の言うように、心臓をごんごん押しても、ねこは生き返らない。

でも、死に近づいても、いろんなことをする。(もりお)

年をとるということは、自分が何もしないで、とるということではなく、ちゃんと仕事か何かをやりとげて、はじめて年をとる。今井先生は「はがき1枚に心をこめておくる」をテーマにして、おじいちゃんの気持ちを伝えたかったのかもしれない。(なつよ)

ぼくは、命のことを短いとも思うし、長いとも思います。楽しいときは1時間でも30分くらいに思うし、つらかったりしたら30分が1時間くらいになります。

「命」とひとことだけど、「命とは」ひとことでは言えない。

命・年をとること・死、全部ひっくるめてぼくは、今を生きたい。(たかひろ)

こうして3年間を共に歩んだ子ども達との日々は終わった。

日野原先生は、子どもの感想文を届けると、新聞の切り抜きや本を再び贈ってくださった。

生きるということは、新しい出会いの積み重ねであることを実感する。

V 考 察

1 シティズンシップの基本

シティズンシップという概念は、特に初等教育現場になじみは薄い。日本では戦後、外から取り込む形で民主主義や市民概念が入ってきたわけだから、自分たちの身体感覚としてもつそれらの概念理解はまだ浅いのかも知れない。しかし、これからの地球規模での諸問題に視野を向けた教育の現代化の課題として、他者とつながりあう知の創造をめざすコラボレーションの資質の育成は欠かすことが出来ないだろう。

私はそう考えた上で、シティズンシップをもつ人(=市民)とは「自分の属する社会の中で、自分達の生活に価値ある文化を協働して創りあげていく人」と定義し、IVの実践のなかからシティズンシップの基本と考えられるものを洗い出してみることにする。

いずれの項目も、学びの主体者としての子どもを主語において考えているが、ともに学びの場を創るという意味では教師にも同様の資質が求められることは間違いない。だから、書き方は個人にとっての資質と、その場にいる仲間全体が空間の質を醸し出すような資質との、両方が渾然一体となるような書きぶりになっている。

① 意思を表明する権利

「自分の考えや思いをその場でまずは自然に表明してよいのだということを、子どもが実体験を通して会得すること」が大切である。その人権感覚を育てることに向けての配慮を最優先したい。

自分のことばやからだで表す、表現の技術を多様に教えていくことが指導のひとつになるだろう。「今ここにいる私」を大切に表現することと、それが互いに保障される環境を創ることだ。

自分の意思を話す・書く・描く・演技するなどの様々な表現技術を使って表す力を個の内面からのものとして育てることと、「私」と「私たち」の間を民主的な関係に育てることとは、表裏一体のできごとである。朝のスピーチを聴きあう(IVの1)なかで、そのような学びあう関わりが実現していった。意思表明の自由と、表明されたものを尊重する責任は、教室という小さな社会を成す仲間との関係のなかで、まず第1に注意深く育まれる必要がある。

それは、(IVの2)のように、詩のことばにのせて思いを伝えるなかでも確かに、次第に育てられていった資質である。「人権とは？」子ども達に直接教えることばとしては難しい。しかし、教室でのできごと、実際のいとなみのなかで体得させていかなければ、将来に至ってもその概念を理解することはできないだろう。欠かすことの出来ない大切な問題だと考えている。

② 協働的な意思決定

教室を、互いに学びあう空間として育てるには、自分中心の意思決定を、協働的ないとなみのなかで

鍛える必要がある。意思を表明すること①、を基盤にして、自分と他者が異なっていることを恐れずに、関わりに身を浸し、そこから再び、自分なりの目標をもって考えたり行動すること。それを奨励する。

子どもは実にさまざまな参加のしかたや、協働のしかたを模索していた(IVの2, 3, 4)。順調に行くこともあれば停滞、葛藤に直面する子も多い。参加のしかたは個性の表れでもあり、心の動きや場の状況とつながって、微妙に変化する。

教師が、子どものことばや行動をつなぐ存在としてカナメとして行動しながら、子ども達の協働的な意思決定の機会を尊重したい。今の子どもたちは、おしなべて葛藤に弱い。他との関わりに参加することは決して楽なことばかりではないが、そこに立ち向かう「必要」を生み出し、対話を経て、次への「希望」を育てることがいざない役としての教師の大切なしごとだと考える。

例えば、劇という状況(IVの4)に入りたくても入れないA子をどう参加させるか(how to)に手練手管を行使するというよりも、A子はなぜ今ここでそのようにしかふるまえないのか(why)を深く問い、まわりとの関係のなかで状況を改善できるように働きかけること。そして協働的な動きを産み出す配慮こそ、まわりまわって個を育てるのだと思われる。

③ 相手の何かを好きになる

共に(co)働く(labor)を語源とするコラボレーションは、役割分担をして何かを為すという予定調和的な協同作業を越えるいとなみである。異なる者同士が、顔の見える関係のなかで対話を積み重ねながら、新しい価値を見いだすことである。

だから、協働を成功させる資質とは何かと考えると、次のようになる。

- ・肯定的に変更できる(ああ、そうなのかと相手の何かを受け入れる)
- ・役割変更が柔軟(いつも、ある人が支配や命令するのではない)
- ・相手の価値観や主張を変えさせようとししない(非難のやりあいは創造に結びつかない)
- ・ずれをプラス思考でとらえる(ずれを嫌って排除するのではなく、何でかな?と考える訓練のきっかけにする)

IVの4、劇を創っていく過程で、でしゃばる女の子に対して「嫌いだ」「いやだ」と文句を言い、けんかになることがあった。ただ「協力しなさい」と言ってもうまくいかないが、「どうしたらいいか」と互いを考えるクールダウンの時間を取り、先生が決めたことに盲目的に従うような伝達一被伝達関係をくずして、平和的で受容的な対話関係を創っていく。

好きな詩を介してつながっていった子ども(IVの2)、劇を創りあげていった子ども達(IVの4)を思い起こすと、協働の状況を生み出すキーポイントは、何かどこか相手を「好き」になること、そういう発見を促すことばの耕しのように思われる。

相手を否定し、嫌いだという情動しかない貧弱な他者理解からは、協働は生まれない。

④ 自立的な賞賛や批判

教室という場を息苦しい囲みにしないために、人をほめたりあるいは意見しあったりすることを日常的に大事にしていく(IVの4)。私のクラスにはかつて「魚釣り」という興味を友達と結びあうことによつて不登校から数年ぶりに教室に戻ってきた男の子がいた。その場にいたいという帰属意識というのは、自分の関心ごとが、みんなの関心になりうるのだという小さな自信、喜びにも似た実感に支えられるのだろう。うれしいこと・困ったことを自由に伝えあえる関係、自立的にそれができるようにすることが、学びあう関わりを育てる。

「この詩が好き」「落語が好き」という個人の世界のできごとが、教室という場で公共的なものとして認められることによって(IVの2・3)、自分がなじみ「知っている」と思いこんでいた世界の新しい意味づけを発見したり(この言葉を自分と違ってあんなふうに捉える人もいるんだ)、わかり方がみんな違うんだなという他者理解につながっていった。基本的に大切なシティズンシップであろう。

⑤ 自治の苦勞と喜び

自分たちを治めるのは自分たちだという意識を育てる。そのためには逆説的だが、できないことはできないと言う勇氣、できないことは友だちを頼ってほしいという共存の関係を否定しないことだ。1年生の最初、「小学校に入学したのだから、しっかり先生の話を書きいて自分でがんばりなさい」という母親の過度な自立支援が、子どもたちの、お互いの状態に注意を向けるケアの意識の育ちを阻害していることに私は気づいた(IVの1)。孤立ではない自立をはぐくみ、自治の基礎となるのは、お互いへの思いやりだ。例えば、恥ずかしくてスピーチができない、小さな声しか出ないということ、個人の能力や態度の問題として捉えるものを見方を変え、聞きたいと思う聞き手の情動を揺さぶること。助けられる関係を育てることだ。「小さなYちゃんの声が聞きたいから」静かにする。お互いに力を添えながら、その場を治めていくことができるように育てる。自治というものも、一朝一夕でできるものではない。繰り返し、失敗の体験も積む必要がありそうだ。IVの1, 2, 3, 4のいずれの実践でも、教室の自治権を、子ども達のなかに育てていく見えない努力があった。実践としてあまり記述できていないという反省が残っている。

授業の場面だけでなく、忘れ物をしたときどうするか、鉛筆が落ちていたらどうするか、騒ぐ人がいて迷惑と感じたとき自分はどのよう行動するのかなど、ささいなことを大切にして、対話的に解決の方法を探すことも、自治の資質を生活から育てる重要なこととなる。

⑥ 契約と責任の意識

契約とは、例えば、話し合いを経てみんなの約束事やルールをつくることから始まり、遂行、確認、妥当性の検討、評価などを「対等に契りあう」関係のなかで構築することを指している。

例えば、(IVの1)朝のスピーチについて、希望者が多すぎて大変だから「毎日6人にしよう」とか「予約する黒板を作ろう」「スピーチの題名は予約の時に書いた方がいいか？書かない方が楽しみか？」「出てきた回数の少ない人を優先しよう」「シーツ」と私語を抑制しあうなど、相談からみんなの約束事を作り出す。作ったきまりもずっと固定せず、実行しながら修正していく。そのような一連の協働作業のなかに、だんだん、自由を保障することと責任を全うすることのバランスを学んでいく。

責任を伴う自由というのは、「みんなで話し合って約束つくったんだから守ろうよ」という契約の意識が育つことと相まって子どもに理解されていく。自分の社会的欲求と、自分たちの共同体としての望ましい在り方とのあいだを調整するのに、契約の意識が鍵になるのではないだろうか。

自ら考えることと、みんなのなかで行動することの関係を考慮しながら、頭とからだで分かちあう契約概念、その実質を支える資質は、よりよい社会を創っていくという意味でシティズンシップの大事な基本だ。

最近、教師の指導力の低下が問われ、権威的位置づけを強調しようとする向きもあるが、子ども達の対話・応答のなかに学びを見出し(IVの1, 2, 3, 4)、学びをつなぐ働きをする教師(IVの5)をめざす立場に立ち、権威一従属ではなく、互いの契約一責任の関係を教室の文化として育むことが大切だと考えている。

⑦ 創造することの尊重

形あるものもないものも含めて、今までと違う世界、価値や意味づけが発見されることが、子ども達の学びの空間を活性化する。(IVの4, 5)で実証されたように、学びを追究し、何かを創造するいなみは教師にとっても子どもにとってもわくわくした楽しさを孕んでいるものだ。教師にとって答えのわかっているものに向かって、子どもを努力させ達成したら終わりというみちすじの勉強にはない良さ、苦勞と喜びを子どもに教えたい。答えがない、つまり創造をいろいろに考え、行動し追究するためには、「きっと良いことがある」と思う(IVの2)楽観性も、学びあう関わりを楽しく遂行していくのに欠かせない資質であるように思われる。

2 今後の課題

① 「活動」と「学び」の関係

「活動は、人間の自由と「共通の世界」を前提とした複数性、多様性の現象する公的世界において営まれる。人間の自由とは、自らが何者であるかを開示することの中で明らかになるのであり、「言葉」と「行為」を含む「活動」こそがそれを可能にする」(『ハンナ・アーレント入門』P52)

学ぶことは広い意味で捉えれば、自由を知ることだと思うが、学校の教室という公的な場、切り取られた空間のなかでいとなまれる活動と学びの私的公的な意味について、さらに考察を深めたい。

② 「判断力」と「公共性」の関係

「判断力とは、共有される公共的空間を保持するための、共同的な理性的能力であり」(同上P62)

子ども達は何かを考えて「判断」しているとき、それは、個々の事柄を判断しているように見えて、他との関わりや何か公共的なものへの可能性を視野に入れて判断しているように思われる。そういう「判断力」のよって立つ感覚が、シティズンシップの基礎である公共性の根っこを支えているように思う。それらの考察を、今後の課題としたい。

3 参考図書

- I・II章 佐伯 胖 (1996) 『「学び」の構造』 東洋館
 佐伯 胖 (1997) 『「学ぶ」ということの意味』 岩波書店
 佐伯・藤田・佐藤 (1996) 『学び合う共同体』 東大出版会
 同上『学びへの誘い』
 箕浦康子 (1997) 『地球市民を育てる教育』 岩波書店
 林 竹二 (1992) 『学ぶということ』 国土社
 秋田喜代美 (2000) 『子どもをはぐくむ授業づくり』 岩波書店
 佐藤 学 (2002) 『学びの身体技法』 太郎次郎社
 同上『学び その死と再生』
 同上 (2001) 『学びの快楽』 世織書房
 パウロ・フレイレ (2002) 『希望の教育学』 太郎次郎社
 里見 実 (2002) 『学ぶことを学ぶ』 同上
 佐藤 学対談集『身体のダイアログ』 同上
 上野千鶴子『さよなら、学校化社会』 同上
 津守 真『保育者の地平』
 川口幸広 (1999) 『モラル・エデュケーション』 八千代出版
 ジーンレイブ, エティエンヌウエンガー (2001) 『状況に埋め込まれた学習』 産業図書
- III章 内田伸子 (1999) 『発達心理学』 岩波書店
 内田伸子 (1998) 『言語発達心理学』 放送大学教育振興会
 成田信子 (2001) 『公開研究会要項』 児童教育研究会
 浅川陽子 (2002) 『公開研究会要項』 児童教育研究会
 若狭蔵之助訳 (1979) シリーズ世界の教育改革7『フランスの現代学校』 明治図書
 浅川陽子 (1996) 『生活から学びへ』 (共著) 青木書店
 佐藤広和 (1995) 『生活表現と個性化教育』 青木書店
 田中仁一郎 (1993) 『教室を変える』 青木書店
 若狭蔵之助 (1986) 『子どもと学級』 東京大学出版会
 浅川陽子 (2000) 『表現する教室』 (共著) 青木書店
- IV章 くだうなおこ (1997) 『のはらうた』 I～IV巻 童話屋
 西口敏治 (1995) 『詩が大すきになる教室』 さえら書房
 姉崎一馬 (2001) 『はるにれ』 福音館

- まどみちお (1994) 『にほんごにこここ』 理論社
村田一枝 (2003) 『じゅげむ』 一莖書房
川端誠 (2000) 『落語絵本』 クレヨンハウス
竹中屋郎 (2002) 『高齢者の孤独と豊かさ』 NHKブックス
『ひと、死に出あう』 (2002) 朝日選書
『ほくたちが日本のおとしよりに学んだこと』 (1998)
毎日新聞社会部「長命社会を生きる」取材班・編
『私たちの遺書—語り残したい戦争体験』—新老人の会 (2001)
日野原重明 (1997) 『健やかないのちのデザイン』 春秋社
大塚敦子 (1997) 『いのちの贈り物 犬・猫・小鳥そして夫へ』 岩波書店
大熊由紀子 (1996) 『「寝たきり老人」のいる国いない国』 おどう社
日野原重明 (2001) 『「新老人」を生きる 知恵と身体情報を後世に遺す』 光文社
V章 中野 光 (2003) 『もっと生かそう教育基本法』 つなん出版
浅川陽子 (2003) 『新生活指導』 (共著) 学文社
鷺田清一 (2002) 『「聴く」こと力』 ティービーエスブリタニカ
刈谷剛彦・濱名陽子・木村涼子・酒井 朗 (2002) 『教育の社会学』
岩永雅也 (2002) 『生涯学習論』 放送大学教育振興会
杉浦敏子 (2003) 『ハンナ・アーレント入門』 藤原書店
小玉重夫 (2004) 『シティズンシップの教育思想』 白澤社

公開研究会要項（平成12年度）より

1年 ことば学習指導案
2組
2月22日（木） 10:00～10:40 1年1組教室 指導者 浅川陽子
話し合い 11:00～11:40 1年1組教室

1. 題材 朝のスピーチから

2. 題材について

(1) 「ことば」という学習領域と題材について

「ことば」という学習領域は、下学年（1、2、3年）の国語科という教科を見直し、内容の再構成や方法の改善をしたいという願いから生まれた。したがって学習内容を削除するものではない。

指導要領から「コミュニケーション」に関する目標のキーワードを挙げてみる。

(低) 尋ねられたことに答える>>速く話す>>耳触したことの意味を考えて話す・話し手を見ながら聞き、話の内容の欠点を聞き取る>>声の大きさに気を付けて話す・丁寧な言葉と普通の言葉のあることに注意して話す・相手の話の<内容>を受けて話す

(中) 要点が分かるように区切りを覚えて話す・話題に合わせて話す・分からないところを<聞き返す>>自分の立場からまとめてみる・<場の状況に応じて>適切な声の大きさや速さを考えて話す

1、2年での<話す・聞く・答える>豊富な学習経験が中学年以降の<考える>力の基盤になる。ここに「ことば」領域のねらいとコミュニケーション重視の内容構成の視点があがる。

(2) 「意味ある学び」との関連

遊びと学びが本質的な関係から、いざ小学生になったときに、どのような学習体験に出会わせていくか、それは、その後の「学び方」や「学習観」を形作る出発点となる大切なことである。

学ぶことを自分の心や身体とつながったものとして体験すること、

言い換えれば、実感・感動と共にある学習体験。そして、それが自分だけの世界のものでなくて、友だちと共に共有できるものであり、広い未知の世界へつながっていくきっかけとなるような、そういう学びの道筋を見せる指導を心がけたい。

それが、先々の意味ある学びへの入り口である。

(3) 「朝のスピーチ」を日常的に学習教材にする意義

子どもたちの生活使用語彙を確かめつづけるために、毎朝の「話したいことをみんなに聞いてもらう」時間を大切に。そこでは、子どもたち個々の生活が語られる。それらの楽しい交流の時間でもある。選んで話す一分からないことを尋ねる一答える一発表されて話す、というような体験を繰り返すことは、身近な事象への興味を育て、他人への共感や理解の芽を育む。

また、その日のスピーチの中から「自分が一番気に入ったものを選ぶ」ことには、小さいと

公開研究会要項（平成12年度）より

きから、人に意見を渡されない自分というものを意識させたいという願いがある。そして、ノートに「書く」際には書き言葉の一斉指導や、1つの作品として字や絵で表現する楽しさと、工夫や責任を体験することができる。

3. 子ども達の感想

この学期の子どもたちは4月半ば過ぎ頃から、本題「朝のスピーチ」から実践を続けてきている。

最初から積極的に前に出るタイプもいれば、2学期の終わり頃になって初めてやった子もいる。「スピーチは、するの面白い、選ばれればすくなくらい」というのが最初のころに比べて、「休み時間におこりにした人はいくつもあるところに来てください」というみんなへのお誘いや、なくし物を探してほしいというお願い、かまきりの準備を調べて話す研究室、手作りマフラーやおもしろドレッシングの披露、替え歌など、内容が多様になり、その時々々のゲームになるものもある。

また、書くときに、新しい漢字を知りたいという要求が無理なく出てくるようになってきている。

4. ねらいと学習計画（3学期 ことば80時間のうちの30時間をあてる）

(1)ねらい

- ・コミュニケーションへの興味を育てる
- ・話せる、書けるという満足感を味わわせる
- ・生活に立脚した多様なことばの体験をさせる

(2)計画（毎時間のおおよその流れ）

- ・「朝のスピーチ」のホワイトボードに、話したい自分の名前マグネットを貼る。
- ・司会は日直、書記はやりたい子多数の場合はくり引きで決める。
- ・ひとりひとりスピーチを行う。
- ・その態度、質問や感想を交流する。
- ・全席終わったら半手投票で、その日書くものを選ぶ。
- ・スピーチが選ばれた子と教師とで、相談して原稿に文章を書く。
- ・みんなで漢字に直せるところ、書き足したいことなどを確認する。
- ・それぞれのノートに、字と絵で作品をしる。

5. 本朝の学習の展開（30時間の18時間目）

主な学習活動	学習内容と評価の観点	留意点
・「今日のスピーチ」を する	・速く話す意欲、聞くこととする気持ち ・丁寧な言葉と普通の言葉の違い ・質問や感想のやりとり ・尋ねる、答える、その状況に応じた対応 ・気に入ったものを選ぶ ・自分の判断 ・より良くすることへの思考	・気持ちよく話せるように。 ・子どもの目線でのやりとりを大切にしよう。 ・適宜感度を保つ。 ・その子ならではの工夫を褒めよう。
・作品として良いものに する意見を出し合う ・ノートにかく	・文字と絵での表現	

公開研究会要項（平成12年度）より

1年 ことば学習指導案
2組
2月23日（金） 9:00～9:40 1年1組教室 指導者 浅川陽子

1. 題材 ふゆめがっしょうだん

2. 題材について

(1) 「ふゆめがっしょうだん」という写真絵本

今回は、聞き取りがくのと写真絵本「ふゆめがっしょうだん」を取り上げる。葉が落ちた後、次の春に花や葉になるものが小さく散らばっている木々の冬芽。子どもたちは木の姿は見えても、冬芽にはめがたがつかない。この本は、その冬芽の不思議なおもしろさを私たちに存分に伝えてくれる。

また、「みんなは みんなは きのおめだよ」で始まる時は、よく見ると人の顔のように見える冬芽の姿とマッチして、もの言わぬ自然の声を伝えてくれるかのようである。言葉のものが写真からのメッセージと相まって、楽しい効果を生んでいる。

ことばの学習は、コミュニケーションの力をつけながら自分を豊かにしていくことを願って内容や方法を工夫するものである。そのことを念頭に置きながら、普段見過ごしている小さな冬芽にスポットを当てて、想像をふくらませたり興味をひらいたりする学習活動を展開してみようと思う。

(2) 言葉の書き

みんなは みんなは きのおめだよ
はるになれば はがでて はながさく
パッパッパッパッ
ゆきよ こおりよ さやうなら
はやく はるが こないかな
パッパッパッパッ
みんなは みんなは きのおめだよ
はるになれば もっと きれいに なるんだよ
パッパッパッパッ
たいようも かぜも すてきねえと ニコニコするよ
パッパッパッパッ
みんなは みんなは きのおめだよ
きのおめだよ

入学してからのいろいろな学習体験の中で、詩を声に出して読むこと、耳で聞くこと、身体を通して響きを感じることを大事にしてきた。1年生の子どもたちにとって、言葉は文字として静かに存在する勉強相手というより、自分のわくわくする心とつながって動き出しはどぼる自己表現のひとつの手段である。そう捉えて、それが表現と呼べるほど離れたとしても、ひとつひとつ大切にしようという心にかけてきた。

公開研究会要項（平成12年度）より

ある言葉に触発されて、それぞれの子どもが感じるものは違う。さらに、感じ考えたことを表す言葉も違う。それらを、学期の良い雰囲気の中で互いに聞き合うことが、コミュニケーションへの真直な意欲と力を育てる基となる。

詩の言葉の響きを、声に出してまずは十分に味わいたいものである。

(3) 読み取り、読み取りへの興味とまなざし

季節感が薄れている今の時代に、言葉や物事への感性を磨き、豊かにするためには、直接自然の姿に接する体験が欠かせない。子どもたちは入学以来、数回に出かけて「はいく」を創るという活動を折に触れて行ってきた。今では指折り数えて五七五を生み出すことになり慣れ、ペンネームを添えて作品を作るようになっていく。

今回、冬芽に目を向けることで、子どもたちはどんな俳句を創るだろうか。

3 目標

- (1) 写真絵本の絵と詩を通して、言葉の響きを楽しむ。
- (2) 冬芽に関心をもち、実際に見たり想像したりして俳句を創る。
- (3) お互いの作品をもとに感想を交流し、良さに気づく。

4. 学習指導計画（2時間限り）

第1時 「ふゆめがっしょうだん」を読む。興味の喚起と学習目的の共有。
第2時（本時） 「ふゆめ」の観察や話し合い、詩の読み込みをする。
自分の俳句の相互鑑賞をする。

5 本朝の学習計画

主な学習活動	学習内容と評価の観点	留意点
・前時の学習活動を思い起こし、冬芽を実際に自分で探して見た子の話を聞く。	・冬芽あるいは季節の変化に細やかな関心をもつことができるか。	・公園などで探ってきた写真があれば拡大して、よく見えるようにする。
・「ふゆめがっしょうだん」をみんなで声に出して読む。	・持は置かうたっているのか、題名の意味など、言葉に着目し想像できることを話し合う。 ・聞き合いができるか。	・写真絵本を（出版社に）了解を得て拡大する。 ・言葉の響きに気を付ける。
・「はいく」を考える。	・冬芽との出会いをテーマにする。自分らしい表現を楽しむことができるか。	・それぞれ短詩に響く。 ・原稿に貼る。
・作品を鑑賞し合う。	・良いなと思ったところを指摘する。	・共に良さを求める姿勢を大事にする。

公開研究会要項（平成 13 年度）より

2年
2組 ことば学習指導案

2月22日（金） 11:30～13:30 2年1組教室 指導者 渡川 絹子

1 学習目標 「はるにれ」「ふたごの木」

2 学習料について
この2冊は、私の大好きな絵師一馬さんの写真絵本である。「はるにれ」は1979年に福音館書店こどものともとして発行され、2001年に22刷《日本製絵本シリーズ》になった時崎さんの写真絵本としては最初の作品であり、「ふたごの木」は谷川俊太郎さんと共著で、今は絶版となっているが、やはり美しい写真物語である。
「ふたごの木」では、静かな夜の上に寄り添ってぼつんと立つ2本のエケマツヅクラの木がアジとアバという姉弟で、四季の移り変わりの中でいろいろなおしゃべりをする。いつも来ていたおじいさんがなくなったこと、風や空のこと、自分が生まれたときのこと、これからの楽しみなど、それらの表現には、小さな木の想いを想像することで、生きているということの深い真実を気づかせてくれる何かを感じている。
「はるにれ」は、広い野原にすくもり立つ1本の大きな木、真のなかでぼんやりと輝く日、登る朝日との出会い、冬から春、そして夏へたがりがりと葉を落とす秋、どのページの写真にもことばは全く添えられておらず、それが、実は豊かな創造の源となろう。
私は、自分の絵がきっかけで、夏前のひとときに「はるにれ」を、空の雲になったり、野原の草原になったりしながら、適当にお話作りをして語り聞かされたことをなつかしく思い出しながら読む。字のないところに物語をさまざまによみとってみたい。
文字がないからこそ、自由によめる、そういう体験も、ことばを育てるために、ときには大切かもしれないと思う。
写真絵本を題材に、自然のものたちの対話を体験し、想像から創造へとことばと心を育んでみたい。そのような願いをもって、今回はこの本を学習料に選んだ。

3 ことば研究会の研究主題との関連
「ともに育つことばの学習」を考えると、ことばの基にある心を問はずにはいられない。同じものを見て感じるものは人によって違っており、それをそれぞれがことばに置き換えて表して初めて誰が見える。そこからスタートして、他人の感じ方の個性やおもしろさ、自分の新しいものの見方の発見へつながっていく。
ともに育つためには、自分の心をことばで表現できること、他人のことばを聞き、その心を感じる、両方できなければならないだろう。
言い換えれば、ことばと心の距離をやりよりの体験を多様に積むなかで、ともに育つというできごとがゆっくりと成されていくのだろう。
そのような学習の輪を築き、ことばの時間の仕組むひとつとして大切にしたい。

公開研究会要項（平成 13 年度）より

4 目標
① 写真絵本をよく見て、みんなで話し合い、想像を広げる。
② 木との対話を創造し、ものがたりを生み出す楽しさを知る。

5 学習指導計画（8時間扱い）
① 「ふたごの木」の音読をして、写真とことばのイメージをみんなで話し合う。（3）
② 「はるにれ」を全部見て、写真が語りかけてくるものをそれぞれがよむ。（2）
③ 「はるにれ」のものがたりを、さまざまに楽しむ。（2）本時2/2
④ 写真家の時崎一馬さんの絵本への思い「木たちの鼓」を読む。（1）

6 本時のねらい
・自分が何かになって、木とおしゃべりする。
・想像の世界をお互いに出し合って、ものがたりを創る。

7 本時の学習指導計画

	主な学習活動	指導上の留意点	備考
5	1. 写真絵本を1ページずつ読んでじっくり見る。	・心のなかで自由な想像をしながら見るようにする。	・スクリーンに大きく映す。
10	2. 自分が、木とおしゃべりする「何」になるか考える。	・木を取り巻く自然の中の、人やものたちをいろいろ思い浮かべさせる。	
20	3. どんなおしゃべりをしよう！だけだけでもよい、全体のストーリーでもよい。		
35	4. 発表する、聞き合う。	・いろいろな視点、もの見方が出てくるようにする。	
40	5. はるにれ物語を創作する。	・想像を楽しみ、みんなで創り上げるようにする。	

公開研究会要項（平成 13 年度）より

3年
2組 ことば学習指導案

2月21日（木） 9:30～10:30 2年3組教室 指導者 渡川 絹子
話し合い 10:30～11:40 2年3組教室

1 単元 「落語を楽しもう」

2 単元について
「落語は、本題に入る前に必ず当り繰りのない世間話などをする。ここで寄席の反応を見定め、その場にもっと適した断を連ねて探しているのだ。こうして一期一会、最高の一筋ができあがる。だから同じ断も、何回きいてもおもしろい。ひとりで聴いて聴かれる、世界に類のないこの話には、江戸伝来のさまざまな工夫がこめられて奥深い。」（竹中ジョージ著「お落語」）
落語という話には、故事や典故のように、見ることや聞くことそのものに重さがあるものとやがて、現実と聴衆と自分と融かして鑑賞し、その場の雰囲気を楽しむものだ。
断の送り手である落語者、受け手である聴衆が、一体となってひとつの作品をつくるという「ともに創造する喜び」がある。また、落語では「一人の落語者が博識な話を登場人物の会話のやりとりを主として進め、その末に落（オチ）をつけて聴衆を興がらせるもの」と落語を解説している。
私は、おもしろいこと、笑えることが大好きな今の子どもたちに、落語という長い年月のなかで磨かれてきた話の、人間的で温かみのある笑いの一端を体験させたいと考えて、この単元を設定した。
〔1〕「語りあって学ぶ力」との関連
単元を展開するなかでの具体的な子どもの姿として、次のようなことが挙げられる。
・ウケる断を連ねたり、笑済しようとする力
・聞き手とともに断を連ね、あるいは断をわかってもらおうとする力
・うなずく、笑うなどの反応をもって、断を聞き楽しんでることを伝える力
・おもしろかった断が自分のことばで相手に返せる力
・落語家の話から良さを感じ取る力
〔2〕ことば研究会の研究主題との関連
「ともに育つことばの学習」をどのように展開するか、さまざまな内容や方法が考えられるなかで、私は「笑い」をキーワードにしている。人間は笑うことのできる唯一の動物であるとともに、人を笑わせることができる動物であると書かれるように、笑いは人間の特性を表す代表的な行為である。従って、話す・聞く・笑うことの共有体験のなかで育つものはさまざまに大きい。
また、芝居や演劇、漫才などと違って、落語は正座して行われる言語遊戯であることから、おのずとことばそのものに注意が集中することになる。ことばをよく聞き、感じることで、それを振り返り自覚化することにより、ことばの方に気づく学びが形成されるだろうと考える。

公開研究会要項（平成 13 年度）より

3 目標
① 落語のおもしろさを、聞く話す自分の経験を通して実感する。
② 笑う、笑えるということの情緒で温かみのある良さを共有する。
③ いろいろなオチのことばおそびを楽しみ理解する。

4 学習指導計画（14時間扱い）
① ゲームや CD で、落語家の断を聞く。（2）
② いろいろな落語、小断を読む。（4）
③ プロの落語家の話を楽しむ。（1）
④ 気に入った断を覚えて、小グループで聞き合う。（3）
⑤ おもしろい落語を、みんなで寄席を作り、聞き合う。（3）本時3/3
⑥ 学んだことをまとめる。（1）

5 本時のねらい
・落語を楽しむ。
・感じたおもしろさや良さを自分のことばで返す。

6 本時の学習活動計画

分	主な学習活動	指導上の留意点	備考
5	1. みんなで寄席の準備をする。	・演説場の雰囲気を感じさせる。	・高座に話し手用の座布団やめくり ・聞き手用の座布団
25	2. 落語を話す、聞く。 (決まらぬようが、数人)	・聞き手とともに場を楽しむという気持ちで話すように指導する。 ・すなおに反応できる雰囲気をつくる。笑う、うなずく、拍手など。	・創造活動で作った演説
35	3. ファンレターを書く。	・気に入ったところ、おもしろかったところなど、話し手を応援する気持ちで書くように指導する。	・ポストカード利用
40	4. 楽しい関わりにつながる ことばを見つける。	・子どもたちの表現の中から拾い出したことばを見つける。	

公開研究会要項（平成14年度）より

3年
2組 ことば学習指導案

2月21日（金） 8:50～9:30 3D教室 指導者 渡川 陽子

- 単元名 劇「新は野原のパラダイス」をみんなで創ろう
- これまでの活動経緯

3年生は、2学期の創造活動の時間に、118人の学年全体を6つのグループに分けて15時間程度の課題選択活動を行った。その中に「劇」というテーマがあり、希望者38人で「お日さまバー、雨がチオキなら、嵐はグー」という劇を創った。

台本を読みながら、役のイメージをつかき、やりたい役を演じながら劇のすじを理解していった。そして、お互いに意見を出し合いながらよりよいものにしていき、1年生や2年生、家の人など、お客さんに見てもらふことの楽しさも味わった。

2学期の最後に課題別の発表会としてお互いの成果を披露しあったところ「私も劇をやりたい」という感想が出てきた。そこで3学期は、ことばの時間を中心に、全員で（学級ごとの取り組みになるが）劇作りをしてみようということになった。

なぜなら、劇を創り上げる過程で子ども達が学ぶものの大きさを実感することができたからである。例を、ことばの力の観点から具体的に挙げてみよう。

 - ・応答 他のセリフを聞いて、それを受けて自分が行動する、そのかたちをシナリオに沿って身につけることができる。特に、みだんは人の話を聞かない自分中心の男の子が、劇の中で何度も失敗しながらみだん人の声に耳をすますようになっていったのが印象的だった。
 - ・ユーモアと権威 活動の半ば頃、ある程度劇の形ができあがってきたところで、4年生に見に来てもらった。お客さんが笑ってくれたことで「面白い」という意識が急に芽生えた、とっつきからだが軟くなる。声にも表情が出るようになる。間わる場を設定することによって、間わりの質がはっきりと変わった。
 - ・批判 人に對して要求するだけではだめだ。自分も、言うからにはやらなければならない、そういうことを、劇を創っていくなかで文句を言い合うなかで学んでいった。批判には建設的であらうとする姿勢が大切だということも、逐語を通して子どもなりに実感できた。
- ことば部会の研究主題とこの関連

「ともに育つことばの学習」と考えるとき、ことばをやりとりする、楽しめそして意味ある場の創出が大切である。

学級のなかま40人で、アイデアを出し合い、練習するなかで賞賛や批判を繰り返しながら、ひとつのものを創ろうとする。その過程で、日常の私ではない「役」になることもあり、いつも違う私（自分も変だらも）の発見もあるだろう。また、劇は見ている人によって育てられる。まさに、ともに育つ学びの場に成りうる総合的・正統的な活動である。

公開研究会要項（平成14年度）より

- 目標
 - 劇のストーリーを理解して、みんなとの協働のなかで自分の役割を創造する。
 - ことばを人との間わりのなかで身体的効率的に使う。

- 学習指導計画（15時間）
 - 台本を読み、ストーリーを知る、やりたい役を考える。（2時間）
 - 反響でいろいろな役になって読みながら、イメージを創る。（3時間）
 - 役役が決まってきたら、演劇のプロにアドバイスをもらう。（4時間）
 - 他の学年の人を招待して、見てもらう。（1時間）
 - 自分たちがいろいろな工夫を費やしてよりよいものを創っていく。（3時間）本時3ノ3
 - 家の人を招待する。（1時間）
 - 学んだことをことばでまとめる。（1時間）

- 本時のねらい
 - よりよい劇を創り上げていくために、自分でよく考えて行動する。
 - 意見を出し合い、聞きあって、みんなで新しいものを創り出す。

7 本時の学習指導計画

学習活動	学習内容	留意点
1. いままでの練習をふりかえり、今日気を付けた方がいいことをみんなで確認する。	ことばをはっきり言うことや、ゆっくりに言うことなど、いつもお互いに注意しあっていることを思い出す。	・劇の流れのなかで思いついたアドリブを大切にしように言葉かけをする。
2. 劇を通してやってみる。	・劇のなかでのお互いの間わりを楽しみながら、ことばから全体で表現する。	・劇中の間わり方を楽しくしように助言する。
3. やり終えての意見を出しあう。	・意見は具体的に、どこをどうしたらよいかを言う。 ・感想もできるだけたくさん書語化する。	・生産的な批判を大切にすること。

- 評価の観点
 - 【主要】自分の言いたいこと、やりたいことを存分に伝えているか
 - 【副的】人と人とのやりとりを聞いて確認しつづ、自分を表現しているか

公開研究会要項（平成14年度）より

3年
2組 ことば学習指導案（改訂版）

2月30日（木） 9:50～10:30 3D教室
指導者 日野原 重明先生（聖路加国際病院理事長）
渡川 陽子（お茶の水女子大附属小教諭）
授業についての話し合い 10:50～11:40 3D教室

- 単元 みんなで考えよう「年をとる」ということ→命の鼓動とは、
- 単元について、これまでの経緯

「Let's talk about 「年をとる」ということ」みんなで生きた21世紀、という本がある。全12巻（ポプラ社1997）のうちの第6巻である。離婚や家族や障害の問題、エイズや差別や「死ぬ」ということなど、いろいろな角度から人間というものを、そしてよりよい社会を創るためにできることを、子ども達と考えようという趣旨のシリーズ本である。

そして、ことばの時間に「みんなで考えよう」学習材とすることから学習を始める。

ほとんどの子どもにとって「面白い」とはいい問題であり、関心のあるテーマとは言えないかもしれない。しかし、最近身近な人の死を体験したり、お墓について自由作文に悩んだりしている子もいる。誰にも子どもの時代があるようにいつか高齢者になるときがある。遠くで近い問題について直感や想像を働かせて考え、実体験を織り交ぜながら交流することによって、「命」というものについての理解をそれぞれ新たにたかたづくことができるのではないだろうか。そういう、今すぐに正解に達するということの無い「話題、知識と行動を音楽にわたって求められていくような話について、小学校で小さいうちから焦点を当てて学んでいくことが人間性の発達という意味でとても大切なことではないか」と、どうとらえているのだろうか。アンケート調査してみた（授業後の話し合いで詳細は後述する）。知る・考えるという種々の一般のイメージでとらえている子が多いこと、お年玉をたくさんくれるというようにかわいがって「くれ」存在としてお年寄りを認識している実態が浮かび上がった。つまり、たくさんのことに喜んでお年寄りを、たった一回の人生というドラマの主人公を生きている「人」として、かけがえのない「命あるもの」として対象化はしていない、それが現状である。

そこで、やはり「人」との出会いのチャンス設ける必要がある。まず「新老人の会」の方々のご協力があった。語学で世界の人となかよく、バイオリンを楽しむ、絵筆を指さすという3つのテーマに分かれて、子ども達は、人生の長いみちのりのなかで育まれた特技に目をみはりながら個性豊かなお話を先生と語り合ひ、いろいろなことを学んだ。

なほ、一方で、祖父に取材する活動を進行して行った。自分が知りたいことを書き出し、答えてもらえらる自分が「1枚研究」にまとめている。子どもの「関心のあること」から広がって、祖父が「伝えたいこと」とも対話の中で生まれている手応えがある。（1枚研究について詳細は話し合いに）
- ことば部会の研究主題「ともに育つことばの学習」との関連

「ともに育つ」ことを考えるとき、ことばの脈にある心を開くにはいられない。心の有りよう、価値観の拠って立つところ、それがことばとなって表れる。今回の学習では、年をとるということを目分がどのようにとらえているか、その認識をまずことばで表し、互いに交流しあう段階がある。その後、さまざまな事実を知ること（体験）により、従来の姿勢が揺るごとく、それを「学び」と考える。そこでは「間わり」ということがポイントになる。そこで互は「間わり」の質を高めることを考えるとき、第1に「聞くことの方」をはくたいと願う。ことばは話すことにより互いに作用を及ぼし、学びの空間に新たな世界を作り出す。それを理解かを支えるのは何より「聞くことの方」だと考える。

よりよく聞くには、注意深くともども聞き手を受け入れる精神が必要なのだと思う。

公開研究会要項（平成14年度）より

本授業では、内科医として長年臨床研究に携わり、現在も幅広くご活躍の日野原重明先生に、子ども達は聴取器を使って「命の鼓動を聴く」体験をさせていただく。新たな出会いのなかで、子ども達は耳をすまし、心に響く意見をたくさんすることだろう。ひとりひとりの学びの姿を促すすばらしい体験（聴くこと）になると信じている。

老いを学習のテーマにスタートしたのだが、当然のことながら福祉や医療など、いのちを尊重する平和な社会を実現するためには広く深い教育研究が今後も必要であることを、単元本で改めて痛感している。生活の体験から創造することばの教育の新しいあり方についてさらに考え続けたいと思う。

- 目標
 - 祖父母に聞いたこと学んだことを「1枚研究」に表す。
 - 「新老人の会」の方との交流を通して年をとることのよさを知る。
 - 「命の鼓動」を聴き、いのちについて考える。

- 学習指導計画（全12時間）について考える？
 - どうして「年をとること」について考えるの？
 - 「年をとる」って、どんなこと？ 「老い」の体験・資料等を観む（1時間）
 - 年をとるにつれて、どんなことがおきるの？ 祖父母の写真等から（2時間）
 - 祖父母にいろいろ聞いてみよう 取材活動（4時間）
 - 新老人の会の方と語り合おう 体験交流（3時間）
 - 「命の鼓動」を聴こう 日野原重明先生特別講演として（1時間一本時）
 - 意見を交流する 読み合い（1時間）

（ライフプランニングセンターの方々のご協力で計画が実現してきました。「私たちの運営」をめぐる学習もこの単元後引き続き行いたいと構築中です）

- 本時のねらい
 - 心臓の音を聴くことを中心にして、いのちについて日野原先生のお話を聞き、質問したりして自分の考えを深めることができる。

7 本時の学習指導計画

学習活動	学習内容	留意点その他
1. 祖父母から学んだことを、一枚研究をもとに話す（約6分）	・友だちの話を聞き、それについて考える ・かけがえのない人ということを確信する	・数分で学んだことを、自分のことばで表すことを大切に
2. 日野原先生のお話を聴く（約30分）	・聴取器で心臓の音を聴く ・91才の心臓と10才の心臓 ・いのちについて	・新しく知ることの喜び、セブスオープンダーを大切に
3. きょう新しく学んだことを（約5分）	・ひとりひとりが、自分の学びを返答し ・異化言語化する。	

- 間わりあって学ぶが育てる評価の観点
 - 【共通】聴くことの方「老い」や「いのち」について認識が変わるきっかけや発見があり、それを自らできているかどうか